

山梨県北巨摩郡白州町

# 上北田遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

白州町教育委員会  
峠北土地改良事務所

山梨県北巨摩郡白州町

# 上北田遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

白州町教育委員会  
峡北土地改良事務所



## 序

この報告書は、平成3年度県営圃場整備事業に伴い、発掘調査された上北田遺跡の調査結果をまとめたものであります。

白州町には、縄文時代から古代、中世までの各時代にわたり、人々の生活の跡を語る埋蔵文化財包蔵地が数多く分布し、各遺跡からは、それぞれの時代の土器類等が発見されています。特に、白須・鳥原・横手地区等の広い段丘面には、大規模な遺跡の存在が知られています。

全町を対象とした水田の圃場整備事業は、昭和58年度から開始され、その間には昭和59年の縄文時代中期の根古屋遺跡の発掘をはじめ、数か所の発掘調査が行われました。

上北田遺跡は、釜無川右岸の高位段丘面上、白州町横手字上北田地内に所在し、約9,500m<sup>2</sup>の範囲にわたり発掘調査されました。

その結果、縄文時代前期の住居址22軒、平安時代の住居址3軒、獨立柱建物址2棟、土坑230基、溝状遺構等が検出されました。その検出された住居址から出土した土器、石器などは現在、中央公民館のホールに設置されたケースに展示されています。

最後に、この事業に協力を賜わりました岐北土地改良事務所・山梨県教育庁学術文化課等関係機関の皆様をはじめ、横手区長を中心として直接にご協力をいただきました皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

白州町教育委員会

教育長 大久保 勝 雄

## 例　　言

1. 本書は、平成3年度県営圃場整備事業に伴って発掘調査した、山梨県北巨摩郡白州町<sup>†</sup>上北田・占御所に所在する上北田遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、峠北土地改良事務所との負担協定による委託と文化庁・山梨県より補助金を受けて、白州町教育委員会が実施した。
3. 遺構の実測は、株式会社バスコへ委託して行った。
4. 遺物の拓本・実測は、川崎、込山（裕）が行い、トレース・写真撮影は杉本が行った。
5. 本文の執筆は、I・III章を杉本が、II・IV章を武藤が担当した。
6. 本調査の出土品・諸記録は、白州町教育委員会が保管している。
7. 発掘調査及び本書の作成にあたり次の諸氏に御教示いただいた。記して感謝いたします。  
伊藤恒彦、今福利忠、小瀬忠秋、小林公明、坂本美夫、下平博行、瀬田正明、長沢宏昌、  
和田　豊  
(敬称略、五十音順)
8. 本調査にあたり、峠北土地改良事務所・山梨県教育庁学術文化課及び地元の横手区の皆様に御理解と御指導をいただいた。心から謝意を表する次第です。

## 調　　査　組　織

調査主体　白州町教育委員会（教育長　道村　初夫　～平成4年9月）  
(　〃　大久保勝雄　平成4年10月～)

事務局　有賀祥司（教育課長）、山本賢二（総務係長）、坂本正明（社会教育係長）  
古屋明美、白砂文香（～平成4年3月）

調査担当者　武藤雄六、折井　敦、杉本　充

調査参加者　中山玉夫、中山てる志、桜井裕子、込山裕代、武藤　實、込山真砂子  
小池登喜子、川崎東洋雄、大久保鶴子、大久保千恵子、山木静枝、中山恵子

## 凡　　例

1. 本調査において20m四方のグリッドを、磁北にあわせて設定した。
2. 遺構平面図は、1/80に統一した。スクリーントーンは、地床炉を表している。
3. 遺物は、1/3を基本とし、土器の完形復元したものを1/4、小型石器などは2/3で図示してある。
4. 内面に施文された土器は、内面の拓影を断面図の右に図示した。

# 目 次

序	
例 言	
目 次	
挿図目次	
図版目次	
I 章 調査状況	1
1節 調査に至る経過	1
2節 調査経過	1
II 章 遺跡の位置と概観	2
III 章 遺構と遺物	3
1節 住居址	3
2節 捶立柱建物址	10
3節 溝状遺構	11
4節 七 坑	11
IV 章 まとめ	18
挿 図	
付 編 炭化材・炭化種子同定報告 パリノ・サーベイ株式会社	
図 版	

## 挿 図 目 次

図1. 遺跡位置図	19	図12. 10号住居址	26
図2. 調査区位置図	20	図13. 11号住居址	27
図3. 1区全測図	20	図14. 12号住居址	27
図4. 2区全測図	21	図15. 13号住居址	28
図5. 2号住居址	23	図16. 15号住居址	28
図6. 4号住居址	23	図17. 16号住居址	29
図7. 5号住居址	24	図18. 17号住居址	29
図8. 6号住居址	24	図19. 18号住居址	30
図9. 7号住居址	25	図20. 19号住居址	30
図10. 8号住居址	25	図21. 20号住居址	31
図11. 9号住居址	26	図22. 21号住居址	31

図23. 22号住居址	32	図40. 18号住居址出土遺物①	45
図24. 23号住居址	32	図41. 18号住居址出土遺物②	46
図25. 24・25号住居址	33	図42. 18号住居址出土遺物③	47
図26. 1号住居址	34	図43. 18号住居址出土遺物④	48
図27. 3号住居址	34	図44. 19号住居址出土遺物	49
図28. 14号住居址	34	図45. 20号住居址出土遺物①	50
図29. 1号掘立柱建物址	35	図46. 20号住居址出土遺物②	51
図30. 2号掘立柱建物址	35	図47. 20号住居址出土遺物③	52
図31. 2号住居址出土遺物	36	図48. 20号住居址出土遺物④	53
図32. 4号住居址出土遺物①	37	図49. 20号住居址出土遺物⑤	54
図33. 4号住居址出土遺物②	38	図50. 20号住居址出土遺物⑥	55
図34. 5・6・7号住居址出土遺物	39	図51. 21号住居址出土遺物	56
図35. 8号住居址出土遺物	40	図52. 22号住居址出土遺物	57
図36. 9・10号住居址出土遺物	41	図53. 23号住居址出土遺物	58
図37. 10・11・15号住居址出土遺物	42	図54. 23・24号住居址出土遺物	59
図38. 16号住居址出土遺物	43	図55. 24・25号住居址出土遺物	60
図39. 17号住居址出土遺物	44	図56. 25・3・14号住居址出土遺物	61

## 図 版 目 次

図版1. 炭化材	図版15. 土器文様①
図版2. 炭化種子	図版16. 土器文様②
図版3. 全景	図版17. 土器文様③
図版4. 近景	図版18. 18号住居址出土石器
図版5. 空撮	図版19. 装飾品・土師質土器
図版6. 2・4～9号住居址	図版20. 炭化種子
図版7. 10～13・15・16号住居址	
図版8. 17～22号住居址	
図版9. 23～25号住居址、粘土貯藏穴、1号住居址	
図版10. 3・14号住居址、1・2号掘立柱建物址	
図版11. 復元した土器①	
図版12. 復元した土器②	
図版13. 復元した土器③	
図版14. 復元した土器④	

# I 章 調査状況

## 1節 調査に至る経過

平成3年度着工予定の山梨県北巨摩郡白州町横手地区県営圃場整備事業に伴い、平成2年10月に実施した埋蔵文化財範囲確認調査により、周知の埋蔵文化財包蔵地である上北田遺跡の範囲が確認された。

範囲確認調査は、県営圃場整備事業予定区域40,000m<sup>2</sup>を対象として、幅2m・長さ10mの試掘坑を任意に設定し、重機により耕作土及び水田床土を排土した後、人力により地山面まで掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認する方法で行った。

その結果、縄文時代早期末から前期初頭と推定される住居址2軒と、中世に属する土坑数基が検出され、これまでの分布調査で確認された範囲より南東に拡がる縄文時代早期末から前期初頭の集落と中世の土坑群の存在が推定されたため、県北土地改良事務所の委託、国・県からの補助金を受けて、町教育委員会が主体となり本調査を実施することとなった。

## 2節 調査経過

発掘調査は、平成3年6月27日から開始し、同年10月4日に現地調査を終了した。その後、報告書作成までの整理作業が完了したのは、平成5年3月25日であった。

調査方法は、平成2年度に調査された本遺跡の南に隣接する新居道上遺跡と同様遺物包含層がないため、バックホーにより調査区全体を遺構検出面であるローム面まで掘り下げた。例外として4号住居址がローム面より15cm程上位で検出されたため、4号住居址の周辺とその南側のF-4区は、人力により掘り下げ若干の遺物を採集した。

調査は、まず農道によって分断される南側を1区(図2)とし7月1日から8日まで掘り下げ測量を終了した。2区とした北側は、7月4日から9月9日まで掘り下げ、引きつづき地上測量とバルーンによる航空写真撮影を10月4日まで行い現地作業を終了した。現地説明会は行うことができなかったが、10月5日に県埋文センターと県考古学協会共催の遺跡発表会において本調査の発表を行った。(発表時には、本遺跡の時期を縄文時代前期初頭としたが、町内で調査されている根古屋遺跡11号住居址、板橋遺跡1~3号住居址を除き、新居道上遺跡1号住居址と本遺跡の22軒の住居址の時期は、縄文時代前期前半が適当であり訂正しておきたい。)

現地作業終了後、多量の炭化種子が出土した17・18号住居址の覆土を室内で2ヶ月乾燥させ17号住15kg、18号住30kgを水洗選別した。水洗選別は、流水で浮遊物を茶こしですくい、沈殿物を5ミリと2ミリのフルイを通して、乾燥後に選別した。その結果、手振りで出土したものとほぼ同量の炭化種子が採集できた。採集された種子は、炭化材とともに遺存状態のよいものを選び、パリノ・サーベイ株式会社に同定を委託した。結果は付録として本書に掲載した。

## II章 遺跡の位置と概観

上北田遺跡は、山梨県北巨摩郡白州町横手字上北田2,150番地付近に所在する。(図1)

この地は赤石山地の北端、甲斐駒ヶ岳の前山群を構成する巨摩山地の一つ黒戸山の山麓で、東に向かって傾斜する扇状地の上にある。この扇状地は、釜無川に向かって東流する尾白川と大武川の支流滻道川との間、中山に遡られた地域で、標高650～750mを示す。

扇状地は、フォッサ・マグナの西線、糸魚川・静岡構造線という大断層の断層面の上に、黒戸山花崗岩の分解砂礫が堆積し、その上に火山灰(テフラ、以後ローム層と呼ぶ)が積もって形成された。ローム層の堆積初期には、この扇状地は極めて不安定な状態を示し、八ヶ岳山麓の所謂チョコロームとバミス・スコリアの三層が整合なのに対し、不整合というよりむしろ搔き混ぜた状態で堆積している。統いて堆積の中～末期では、安定した堆積状態を示している。ところが、時として糸魚川に直交する小断層の発達する個所があり、そこでは、隣接する小河川や帶状の小丘陵ごとローム層と砂礫層が交互に見られることがある。

今年度発掘調査した上北田遺跡では、前年度調査の新居道上遺跡に続く1区で、1m余厚程度の中部ローム層の下部で前述の三種混合層に達し砂礫層へと移行する。ところが、小河川を境にその南ではローム層が無く砂礫層で上部は砂層となる。また更に、東西に通ずる農道を隔てた2区でのローム層は、最下部を除き中・上部ロームの堆積が八ヶ岳山麓のそれと同一の層序を示し、南寄りで1区の三種混合層が押被さる。したがって、1区と2区との関係は逆断層となり、また、2区の西方にある小丘陵は衝上丘陵ということになる。

次に遺跡での表土は、黒戸山花崗岩の風化分解した砂と細粒花崗岩の小礫を含んだ黒色の腐植土からなり、少なくとも、今から10,000年前以降、断層活動や黒戸山の大規模な崩落などはなかったようである。現在、標高720m以下および遺跡地の大部分は畠と、緩い傾斜面を切り盛りして開田している。(図2)

今年度の調査は、地形や道路と排土置場等を考慮して1区と2区に分割して行った。1区は、表土を除いた後、中部ローム下部面を平坦に切り盛りして開田された地区で、削られた部分での遺構はほとんど消失し、盛られた場所では円形～長方形の土坑が三種混合層に達して掘込まれていた。2区は、西方、衝上丘陵の直下(695m)から150m下方の標高684m地点にわたって実施した。この間、畠は1筆だけ他はすべて水田であった。水田は、最上部の軟質ロームおよび長石片を含む上部ローム層に達して削られていた。畠は、長芋を栽培していたためトレンチャーによる溝掘りによって深さ1m程も搅乱が及び調査に重大な障壁をきたした。2区での遺構は、縄文時代前期前半と平安時代最末の竪穴住居址および、円形と長方形土坑ならびに掘立柱住居などが検出された。これらは、削り面では消失したり、痕跡をとどめる程度にまで削られていた。また、2区を南北にV字状の溝が走っていたが、遺跡の北を東流する小河川で消失していた。(図3・4)

### III章 遺構と遺物

#### 1節 住居址

本調査では、竪穴住居址は25軒検出された。1・3・14号住居址（平安時代）の3軒を除いたのこり22軒すべて縄文時代前期前半に属すると思われる。22軒の住居址はすべて、主柱穴が直径、深さとも25cm程度で、床面が軟弱であった。出土した土器は、多くは無文でまれに口縁の近くに斜格子や、櫛状工具か撚糸で斜の沈線を施文された繊維を多量に含む土器に、少量の中越式土器や神ノ木式土器などが加わる。土器の分類は、すべての住居址において大多数を占める無文のものをI群とし、隆蒂・刺突・斜格子沈線のあるものをII群（図版15-a～d）、櫛状工具や撚糸による沈線のあるものをIII群（図版15-e～h・16-a～d）、縄文・組紐文・ループ文・コンパス文・刺突文・列点文などを施されたものをIV群（図版16-g, h・17-a～f）、微量みられた指頭圧痕が顯著で器厚が2～3ミリのものをV群（図版17-h）とした。その下に繊維を含むものを1類、含まないものを2類とした。I群2類とII群2類が中越式、IV群2類が神ノ木式に相当する。量的に大多数を占めるI群1類の土器は、一括して出土し復元の容易であったもののみ図示した。石器は、阿久遺跡において固定式石皿とされている扁平大型の台石と使用痕のある剥片（刃こぼれが肉眼で確認できるもの、ほとんど黒曜石）を除き住居址出土のものはすべて図示した。

##### 2号住居址（図5、31・図版6-a, 11-1）

西から東に傾斜する調査区の西側、E-3区に位置する。隅丸長方形を呈し、5×4.3mを測る。58-1・-2・59号土坑に切られている。炉は、わずかに掘り込まれた地床炉である。主柱穴は、検出された2本の他にあと2本存在すると考えられたが検出されなかった。覆土は、4層に分けられた。1層は、ロームを微量含む暗褐色土。2層は、ロームを少量と炭化材を多量含む暗褐色土。3層は、ロームと多量の炭化材を含む暗褐色土。4層は、ロームと多量の炭化材と微量の焼土を含む暗褐色土である。

上器（図31-1～4）は、1を除き繊維が含まれている。1は、東側の主柱穴と東南隅との間に床直で一括出土した。石器は、スクレイバー3点（5～7）、打製石斧4点（8～11）、叩石1点（12）、使用痕のある剥片2点が出土している。石材は、5が黒曜石、6が珪質頁岩、7・9が砂岩、8・12が結晶片岩、10・11が安山岩である。

##### 4号住居址（図6、32、33・図版6-b, 11-2）

調査区西側、E-4区に位置する。2号住居址から東へ14m離れている。隅丸長方形を呈し、6.3×5mを測る。掘り込みのない地床炉をもつ。覆土は、3層に分けられた。1層は、ロームを微量含む黒褐色土。2層は、ロームを少量含む暗褐色土。3層は、径5cm程のロームを斑状に含む暗褐色土である。

土器（図32-1～7）は、1を除き纖維を含んでいる。石器は、スクレイバー9点（32-8～15・33-3）、石鏟2点（33-1, 2）、石鑿1点（4）、叩石2点（5, 6）、磨石2点（7, 8）、石皿2点（10, 11）、使用痕のある剥片4点がある。石材は、32-8～14, 33-1～4が同質の青灰色のチャート、32-15が鉄平石、33-5が砂岩、6が結晶片岩、7～10が安山岩である。他に、水晶片3点がある。

#### 5号住居址（図7, 34-1～3・図版6-c）

調査区中央西寄り、E-4区に位置する。長いも畑として利用されていた部分のため6, 8号住居址とともにトレンチャーにより約30cmおきに幅30cmずつ破壊されていた。覆土は多量のロームを含む暗褐色土で、かなり搅乱を受けていた。掘り込みのない地床炉をもつ。  
文様の認められる土器（図34-1）は、纖維を含む1点だけである。石器は、スクレイバー2点（34-2, 3）がある。石材は、2がチャート、3が黒曜石である。

#### 6号住居址（図8, 34-4～7・図版6-d）

調査区中央、D-6区に位置する。隅丸長方形を呈し、4.6×4mを測る。トレンチャーによる破壊をうけている。かは確認できなかった。覆土はロームを多量含む暗褐色土で、搅乱を受けている。

文様の認められる土器（図34-4）は、纖維を含む1点だけである。石器は、スクレイバー3点（34-5～7）、使用痕のある剥片6点がある。石材は、5が黒曜石、6が砂岩、7が鉄平石である。

#### 7号住居址（図9, 34-8・図版6-e）

調査区中央、E-6区に位置する。東側約半分が削平されている。隅丸方形を呈すると思われる3.5×(2.3)mを測る。掘り込みのない地床炉をもつ。覆土は、ロームと黒褐色土を斑状に含む褐色土である。

土器は、纖維を含んだ小片が数点出土しただけである。石器（図34-8）は、扁平な安山岩の表面を楕円形に凸凹をつけた石皿の未製品が出土している。

#### 8号住居址（図10, 35・図版6-f）

調査区中央南寄り、E-6区に位置する。不規円形を呈し、径5.1mを測る。トレンチャーによる破壊を受けている。掘り込みのない地床炉をもつ。炉の東に、安山岩の固定式石皿（11kg）が置かれていた。

土器（図35-1～6）は、いずれも纖維を含んでいる。6は、かなり摩耗しているが開山式と確認できる唯一の土器片である。石器は、スクレイバー3点（35-7, 8, 12）、打製石斧2点（9, 10）、石核1点（11）、使用痕のある剥片3点がある。石材は、7, 8, 11, 12がチャート、9が細粒花崗岩、10が砂岩である。

#### 9号住居址（図11、36-1～10・図版6-g, h）

調査区中央北寄り、D-5区に位置する。南側の壁が水路により破壊されていたが、壁柱穴から一辺4m程の隅丸方形を呈するものと推定できる。掘り込みのない地床炉をもつ。115, 116, 221号土坑によって切られている。本址の覆土は、3層に分けられた。1層は、多量の黒褐色土を斑状に含む暗褐色土。2層は、黒褐色土と少量のロームを含む暗褐色土。3層は、ロームブロックを多量含む暗褐色土である。

土器（図36-1～8）は、6のみ繊維が含まれている。1は、炉のやや西で一括して出土した（図版6-h）。括れ部に円形の剥落が数ヶ所認められる。8は、丸棒状工具により右上から左下に斜めに刺突を施され、口唇部にも同じ工具で右から左に斜めに刺突されている。石器は、石匙1点（36-9）、スクレイバー1点（10）、使用痕のある剥片3点がある。石材は、9, 10ともホルンフェルスである。

#### 10号住居址（図12、36-11～17, 37-1, 2・図版7-a）

調査区北側、C-5区に位置する。隅丸長方形を呈し、4.5×4mを測る。覆土は、多量の黒褐色土を斑状に含む暗褐色土で、かなり搅乱を受けていた。掘り込みのない地床炉をもつ。

土器は、極少しか出土しなかった。施文されたものは、2点（図36-11, 12）だけであった。石器は、スクレイバー3点（36-13～15）、石匙1点（16）、石鏃1点（17）、磨石2点（37-1, 2）、使用痕のある剥片1点がある。石材は、36-13がホルンフェルス、14, 17が黒曜石、15が珪質頁岩、16がチャート、37-1, 2が安山岩である。

#### 11号住居址（図13、37-3～9・図版7-b）

調査区北側、C-6区に位置する。隅丸長方形を呈し、3.8×3mを測る。213号土坑に切られている。覆土は、2層に分けられた。1層は、黒褐色土を斑状に含む暗褐色土で、耕作による搅乱を受けている。2層は、ロームを多量に含む暗褐色土である。掘り込みのない地床炉をもつ。

土器（図37-3～7）は、すべて繊維を含んでいる。石器は、黒曜石製のスクレイバー1点（37-8）、安山岩製の磨石1点（9）がある。

#### 12号住居址（図14・図版7-c）

調査区北端、B-6区に位置する。隅丸長方形を呈し、3.3×3mを測る。129, 135, 211, 212号土坑に切られている。主柱穴と炉は、検出されなかった。本址は、ほとんど削平されていたが、壁柱穴と、繊維を含む無文の土器片と黒曜石の剥片から、縄文時代前期前半に属するものと推定された。

#### 13号住居址（図15・図版7-d）

調査区中央東側、E-6, 7区に位置する。水田造成の際に削平された区域で検出されたた

め、床面と主柱穴のみ確認された。床面は隅丸長方形を呈し、 $4.6 \times 3.9$ mを測る。掘り込みのない地床炉をもつ。遺物は、西南側の柱穴の検出時に纖維を含む土器片が2点出土しただけである。

#### 15号住居址（図16、37-10～16・図版7-e）

調査区東側、D-7区に位置する。北辺にやや丸みがあるが隅丸長方形を呈し、 $4.6 \times 4.3$ mを測る。180、181、214号土坑に切られている。掘り込みのない地床炉をもつ。覆土は、4層に分けられた。1層は、ロームを少量含む暗褐色土。2層は、ロームを含む褐色土。3層は、ロームを多量含む褐色土。4層は、褐色土を含むロームである。

土器（図37-10～14）は、14を除き纖維を含んでいる。石器は、チャート製のスクレイバー1点（37-15）、細粒花崗岩製の磨石1点（16）がある。

#### 16号住居址（図17、38・図版7-f～h、11-4～6）

調査区の北東端、B、C-8区に位置する。東側が一部削平されているが、不整形を呈し、 $5 \times 4.3$ mを測る。掘り込みのない地床炉をもつ。覆土は暗褐色土で、壁際にはロームの三角堆積が認められた。

土器（図38-1～6）は、2と6を除き纖維は含まれていない。3は、1のなかから出土した（図版7-h）。石器は、スクレイバー4点（38-7、8、11、12）、石匙1点（13）、打製石斧1点（9）、磨石1点（10）、使用痕のある剥片8点がある。石材は、7、8、13がチャート、9が砂岩、10が安山岩、11、12が黒曜石である。他に、水晶片9点がある。

#### 17号住居址（図18、39・図版8-a、b）

調査区東端、E-9区に位置する。集中して検出された9軒のうちの1軒である。隅丸長方形を呈し、 $4.2 \times 3.6$ mを測る。掘り込みのない地床炉をもつ。東壁の近くに、台形を呈する細粒花崗岩の固定式石皿（31kg）が置かれていた。覆土は、6層に分けられた。1層は、炭化材とロームを少量含む黒褐色土。2層は、暗褐色土とロームを含む黒褐色土。3層は、多量の炭化材とローム、炭化種子を含む黒褐色土。4層は、ロームを多量含む暗褐色土。5層は、暗褐色土を少量含むローム。6層は、暗褐色土とローム、炭化種子を含む黒褐色土である。セクション（図18）中の黒漁り部分は炭化材である。炭化種子は、橢円形のコナラ属の子葉230g、細片が約120g出土した。

土器（図39-1～10）は、1、2を除き纖維を含まない。石器は、スクレイバー3点（13、14、19）、石鏃1点（20）、打製石斧4点（11、12、15、16）、叩石2点（17、18）、使用痕のある剥片7点がある。石材は、11、13、17が砂岩、12、15が結晶片岩、14、19がチャート、16がホルンフェルス、18が花崗岩、20が黒曜石である。

#### 18号住居址（図19、40～43・図版8-c, 9-g, 12-1～3, 18, 20）

調査区東端、E-9区に位置する。集中して検出された9軒のうちの1軒である。隅丸長方形を呈し、3.8×3mを測る。北西コーナーに、深さ10cm程のテラスが設けられている。検出時のプランがひとまわり大きく方形を呈していたこともあり（17号住居址においても同様であった）、さらに何かしらの施設が上位に設けられていた可能性がある。掘り込みのない地床炉をもつ。南壁近くに、台形を呈する安山岩の固定式石皿（14kg）が置かれていた。覆土は、4層に分けられた。1層は、ロームを微量含む暗褐色土。2層は、ロームを少量含む暗褐色土。3層は、ロームを多量含む暗褐色土。4層は、ロームを含む暗褐色土。1, 2, 4層には、炭化種子と多量の炭化材が含まれていた。出土した炭化種子（図版20）は、球形のコナラ属の子葉約400g、楕円形のコナラ属の子葉約350g、細片約530g、クリ10個程度、花芽のようなものなどがあった（付録参照）。

土器（図40-1～5, 41-1～13）は、40-1～3, 41-3, 5を除き纖維は含まれない。ほかに、無文で纖維を含む径2.5cmの上製円盤と思われるものが1点あった。石器（図版18）は、スクレイバー4点（42-11～14）、石匙4点（1～4）、石鎌3点（5～7）、ドリル3点（8～10）、磨製石斧2点（15, 16）、打製石斧7点（42-17～19, 43-1～4）、磨石3点（43-5～7）、叩石2点（8, 9）、使用痕のある剥片12点がある。石材は、42-1～3・10～14がチャート、4～9が黒曜石、15, 16が蛇紋岩、17, 19が鉄平石、18が泥岩、43-1, 5～7が安山岩、2が細粒花崗岩、3, 4が結晶片岩、8, 9が砂岩である。

#### 19号住居址（図20、44・図版8-d, 12-4）

調査区東端、E-8, 9区に位置する。集中して検出された9軒のうちの1軒である。東辺が丸みを帯びているがほぼ隅丸長方形を呈し、5.1×4.3mを測る。掘り込みのない地床炉をもつ。覆土は、3層に分けられる。1層は、黒褐色土と少量のロームを含む暗褐色土。2層は、ロームを含む暗褐色土。3層は、ロームを多量含む暗褐色土である。

土器（図44-1～8）は、1～3を除き纖維を含まない。石器は、スクレイバー4点（9～12）、ドリル1点（13）、使用痕のある剥片20点がある。石材は、9が砂岩、10が結晶片岩、11～13が黒曜石である。

#### 20号住居址（図21、45～50・図版8-e, f, 12, 13-1～3, 19-3）

調査区東端、E-9区に位置する。集中して検出された9軒のうちの1軒である。隅丸長方形を呈し、6.9×5.3mを測る。北側に、18号住居址と同様の深さ10cm程のテラスが設けられている。201号上坑に切られている。棟持柱の柱穴と思われる2本のビットが、ほぼ長軸線上に隣接している。検出された周溝から1回以上の拡張が考えられる。炉は掘り込みのない地床炉で、中央から西に細長く炭化材を含んだ焼土が堆積していた。覆土は、5層に分けられる。1層は、ロームを微量含む暗褐色土。2層は、ロームを少量含む褐色土。3層は、ロームを含む褐色土。4層は、ロームを多量に含む褐色土。5層は、褐色土を含むロームである。

本址から1~3m西に検出された5本のビットのうち4本から、灰色を呈する粘土が出土している(図版9-e, f)。また7m西に離れた一本のビットからも粘土と繊維を含む土器の小片が出土している。

土器(図45-1~3, 46-1~3, 47-1~18, 48-1~24)は、45-1, 3, 46-1~3, 47-1, 8を除き繊維は含まない。石器はスクレイバー29点(48-25~32, 49-1~16, 50-7~11)、打製石斧3点(49-17~19)、磨石3点(49-20~22)、石匙6点(50-1~6)、石鏃6点(50-12~17)、ドリル3点(50-18~20)、使用痕のある剥片69点がある。50-6は、抉りより下が全面磨かれていた。石材は、48-25, 29, 49-4, 8, 11, 12, 50-2, 3がチャート、48-26, 31, 49-14~16, 18, 19が結晶片岩、48-27, 49-6, 7, 50-5~20が黒曜石、48-28, 30, 32, 49-10, 17, 50-1がホルンフェルス、49-1, 5, 13が砂岩、49-2, 3, 9, 50-4が珪質頁岩、49-20~22が安山岩である。そのほか滑石製装飾品(50-21)、水晶片5点(1点は6角柱状)と黒曜石の細片が1,080g出土している。

#### 21号住居址(図22, 51・図版8-g)

調査区東端、E-9区に位置する。集中して検出された9軒のうちの1軒である。西コーナーが削平されているが、隅丸方形を呈し、4.2×4mを測る。覆土は、4層に分けられる。1層は、ロームと炭化材を微量含む暗褐色土。2層は、少量のロームと微量の炭化材を含む暗褐色土。3層は、ロームと微量の炭化材を含む暗褐色土。4層は、ロームを多量に含む褐色土である。地床炉は検出されなかった。

土器(図51-1~7)は、5~7を除き繊維を含んでいる。石器は、スクレイバー2点(51-8, 14)、石鏃1点(15)、打製石斧2点(9, 10)、磨石3点(11~13)、使用痕のある剥片13点がある。石材は、8, 14が黒曜石、9がホルンフェルス、10が結晶片岩、11~13が安山岩、15がチャートである。そのほか水晶片1点が出土している。

#### 22号住居址(図23, 52・図版8-h)

調査区東端、D-9区に位置する。集中して検出された9軒のうちの1軒である。不整円形を呈し、6.2×5.7mを測る。202, 203号土坑に切られる。掘り込みのない地床がをもつ。覆土は、5層に分けられる。1層は、ロームを含む黒褐色土。2層は、ロームと炭化材を微量含む暗褐色土。3層は、少量のロームと微量の炭化材を含む暗褐色土。4層は、ロームを含む暗褐色土。5層は、褐色土を含むロームである。

土器(図52-1~14)は、9を除き繊維を含まない。4は、撚糸の地文に平行沈線を施されている。明褐色を呈し、焼成が大変良好である。2号住居址出土の図31-3は、地文が不明瞭だが、4と非常に似ている。石器は、スクレイバー6点(52-20~25)、石匙2点(18, 19)、石鏃1点(26)、ドリル2点(27, 28)、磨石2点(15, 16)、石皿1点(17)、使用痕のある剥片9点がある。石材は、15, 17が安山岩、16が花崗岩、18が珪質頁岩、19, 20, 23~27が黒曜石、21が泥岩、22がチャート、28がホルンフェルスである。その他、水晶片1点がある。

### 23号住居址（図24、53、54-1～3・図版9-a、14-4、5、19-1）

調査区東端、D-9区に位置する。集中して検出された9軒のうちの1軒である。円形を呈し、直径5mを測る。198、204、208号土坑に切られる。土坑に切られた部分を除き、周溝が在る。掘り込みのない地床炉をもつ。覆土は、3層に分けられる。1層は、ロームを少量含む暗褐色土。2層は、ロームを含む暗褐色土。3層は、褐色土を含むロームである。

土器（図53-1～12）は、5、9、10を除き纖維を含む。石器は、スクレイバー2点（54-1、2）、打製石斧2点（53-13、14）、磨石2点（53-15、16）、使用痕のある剥片17点と水晶片2点がある。石材は、53-13が結晶片岩、14が砂岩、15、16が安山岩、54-1、2が黒曜石である。そのほか、208号土坑から南に2本目の側柱穴から、黒色を呈する硬玉製品1点（図54-3・図版19-1）が出土している。

### 24号住居址（図25、54-4～16、55-1～10・図版9-b、c）

調査区東端、D、E-9区に位置する。集中して検出された9軒のうちの1軒である。北側の一部が25号住居址と重複する。プラン検出時には、本址が25号住居址を切っているように見られたが、覆土に違いもなく重複部分の搅乱（4層）もあり新旧関係は不明である。205、222号土坑に切られている。不整円形を呈し、5.4×（5）mを測る。掘り込みのない地床炉をもつ。炉の南に接して細粒花崗岩の丸石（図54-16・図版9-c）が置かれていた。覆土は、4層に分けられる。1層は、ロームと炭化材を少量含む暗褐色土。2層は、ロームを多量含む暗褐色土。3層は、暗褐色土と黒褐色土を斑状に含むローム。4層は、しまりがなくロームを含む1層より暗い暗褐色土（搅乱）。

土器（図54-4～9）は、8、9を除き纖維を含まない。石器は、スクレイバー5点（55-3～7）、石匙2点（1、2）、石鏃2点（8、9）、ドリル1点（10）、磨石1点（54-15）、叩石5点（10～14）、使用痕のある剥片22点がある。石材は、54-10～14が砂岩、15が安山岩、55-1、2、4～6、8～10が黒曜石、3がチャート、7が珪質頁岩である。

### 25号住居址（図25、55-11～17、56-1～6・図版9-d、19-2）

調査区東端、D-9区に位置する。集中して検出された9軒のうちの1軒である。24号住居址と重複する。24号住居址より本址の方が掘り込みは深いが、新旧関係は不明である。椭円形を呈し、4.4×3.7mを測る。掘り込みのない地床炉をもつ。

土器（図55-11～15）は、11、12を除き纖維を含む。石器は、打製石斧1点（55-16）、表裏に大きな凹みをもつものの1点（17）、磨石2点（56-1、2）、スクレイバー1点（3）、石鏃1点（4）、ドリル1点（5）、使用痕のある剥片8点がある。石材は、55-16が砂岩、55-17、56-1、2が安山岩、3がホルンフェルス、4、5が黒曜石である。ほかに、水晶片1点と、オリーブ色を呈する玉製抉状耳飾り（図56-6・図版19-2）が出土している。

以上、縄文時代前期前半に属する住居址

### 1号住居址（図26・図版9-h）

調査区西端、F-2区に位置する。25、45号土坑に切られている。台形を呈し、4×3.6mを測る。覆土は、黒褐色土とロームを斑状に含む暗褐色土である。カマドは東南隅にあり、石と粘土を使用して構築されている。カマドの西に接して炭化材を含む焼上がり詰まった灰穴がある。遺物は、灰穴から出土した甕の小片1点だけである。本址は、カマドの位置などから平安時代末期に属すると思われる。

### 3号住居址（図27、56-7～12・図版10-a、b）

調査区西側、E-3区に位置する。隅丸長方形を呈し、6.4×5.2mを測る。210号土坑に切られている。カマドは東南隅にあり、石と粘土を使用して構築されている。カマドの西に接して灰穴がある。カマド部分と南西コーナーを除き周溝があるが、南西部は床面を掘りすぎたため周溝が巡っていた可能性がある。

本址の床面は、南西コーナーを除き固くしまっていて、P-1～4のプランとその中心にある焼土も踏み固められていた。P-1～4を結ぶと台形を呈することと地床炉から本址は、绳文時代前期前半の住居址と全く重なって構築されていると考えられる。

遺物は、あまり出土していない。図56-7はチャート製スクレイパー、8は鉄製品、9、10は安山岩製磨石、11は灰釉陶器、12は土師質土器である。

本址は、カマドの位置などから平安時代末期に属すると思われる。

### 14号住居址（図28、56-13～17・図版9-c～e、19-4～6）

調査区東側、C-7区に位置する。北側の半分以上が、水路と水田造成のため破壊されている。遺存部分で、3.1×(1.4)mを測る。東西に走る水路は2本あり、ややずれて重複していた。先行する水路からは、近世のものと思われる陶器が出土している。カマドは東南隅にあり、石と粘土を使用して構築されている。本址の覆土には、炭化材と多量の焼土が含まれていた。

出土した遺物（図56-13～17）は、すべて土師質土器である。13は、カマドの煙道の蓋として利用されていた（図版9-d）。14と15は、合子で出土した（図版9-e）。

本址は、カマドの位置などから平安時代末期に属すると思われる。

## 2節 挖立柱建物址

### 1号掘立柱建物址（図29・図版10-g）

調査区中央北寄り、D-6区に位置する。南北に長い建物で、梁行2間、桁行3間である。柱穴の中心を基準にすると、南北7.6m、東西3.9mの長方形を呈する。最も西の列の南から2本目の柱穴から、鉄平石を5角形に打ち欠いた礎石が検出された。

### 2号掘立柱建物址（図30・図版10-h）

調査区北側、B-6、7区に位置する。南北に長い建物で、梁行1間、桁行2間である。柱

穴の中心を基準にすると、南北4.8m、東西3mの長方形を呈する。本址の東側に、11.3mの間に20~40cm間隔で34本（径10cm、深さ15cm程）のピット列があり、またその東に接して歟跡があった。ピット列は、本址か歟跡に伴う構の可能性も考えられる。

### 3節 溝状遺構

1条検出された。調査区の西端から北端まではほぼ直線で、80mにわたり確認された。3か所で断面を観察したほかは、検出プランの記録だけの調査しか出来なかった（図4）。幅2m、深さ80cm程で断面はV字型を呈し、覆土は底部に白色砂が2~3cm堆積しているほかは黒色土1層だけである。重複関係は、長方形の土坑2基（215、217号土坑）に切られているだけである。

### 4節 土坑（土坑一覧表P12~17参照）

230基検出された（図4）。その内訳は、覆土とそのしまりから縄文時代に属すると思われる8基（177~180、205、207、208、221号土坑）を除き、円形土坑191基、長方形土坑24基、椭円形土坑6基、方形土坑1基である。

前年度調査された隣接する新居道上遺跡と上北田3遺跡からは合計296基の土坑が調査され、円形土坑203基、長方形土坑68基が報告されている。この一帯だけで486基ある「円形土坑」と「長方形土坑」は、ほとんどが明瞭な工具痕（幅5~6cm）が残り、埋め戻されてはいるが遺物は含まれていない。現況の水田が近世に開かれたと考えられることと、平安時代末期の住居址が破壊されていることから、この土坑群は中世に掘られたものと考えられる。

### 参考文献

- 折井 敦「上北田3遺跡・新居道上遺跡」白州町教育委員会 1991  
折井 敦「板橋遺跡」白州町教育委員会 1989  
平野 修「根古屋遺跡」白州町教育委員会 1985  
樋口昇一 他「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書－諏訪市－その4」  
長野県教育委員会 1976  
浜沢 浩 他「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書－原 村－その5」  
長野県教育委員会 1982  
小池 孝 他「中越遺跡」宮田村教育委員会1990  
松永満夫 他「お供平遺跡II」信州新町教育委員会 1989  
神村 透「田中洞（縄文前期の遺構と土器）」王滝村教育委員会 1988  
堤 隆・賀田 明「塩野西遺跡群 城之腰遺跡」御代田町教育委員会 1992

# 土坑一覧表

番号	平面形	横 (cm)			覆	土	備考
		横出面	深さ	底面			
1	円形	103×102	10	90×92	黒褐色土	ロームを若干含む	
2	円形	80×82	13	71×75	暗褐色土	ロームを含む	
3	長方形	142×93	59	122×85	黒褐色土	ロームを若干含む	
4	円形	128×125	60	115×111	黒褐色土	ロームを若干含む	
5	長方形	151×93	115	140×88	暗褐色土	ロームを含む	
6	長方形	166×106	63	150×90	黒褐色土	ロームを若干含む	
7	長方形	174×101	93	162×93	暗褐色土	ロームを含む	
8	長方形	146×90	63	141×73	暗褐色土	ロームを含む	
9	長方形	200×105	116	193×94	暗褐色土	ロームを含む	
10	円形	154×145	36	135×112	暗褐色土	ロームを含む	11.12土と重複
11	長方形	130×85	42	125×77	暗褐色土	ロームを含む	10土と重複
12	長方形	133×85	86	118×78	暗褐色土	ロームを含む	10土と重複
13-1	長方形	(170)×(140)	84	163×133	黒褐色土	ロームを若干含む	
13-2	長方形	165×(30)	50	160×(25)	黒褐色土	ロームを若干含む	
14	長方形	222×81	111	212×68	暗褐色土	ロームを含む	
15	椭円形	107×73	9	98×55	黒褐色土	ロームを若干含む	5土は重複
16	円形	121×119	56	109×104	黒褐色土	ロームを含む	
17	円形	140×128	70	120×105	上暗褐色土 下黒褐色土	ロームを若干含む ロームを含む	
18	円形	128×128	77	107×107	黒褐色土	ロームを含む	
19	円形	100×97	48	86×80	黒褐色土	ロームを含む	
20	円形	100×98	48	86×85	黒褐色土	ロームを含む	
21	長方形	107×75	77	100×59	黒褐色土	ロームを含む	
22	円形	107×107	79	91×93	黒褐色土	ロームを含む	
23	円形	150×142	88	111×101	黒褐色土	ロームを若干含む	
24	円形	111×101	65	96×87	黒褐色土	ロームを含む	
25-1	円形	116×96	50	111×80	黒褐色土	ロームを含む	
25-2	円形	110×105	21	104×98	黒褐色土	ロームを若干含む	
26	円形	100×110	85	85×90	黒褐色土	ロームを若干含む	
27	円形	120×116	75	107×106	黒褐色土	ロームを含む	
28	円形	123×119	64	108×106	黒褐色土	ロームを含む	
29	円形	110×106	72	94×90	黒褐色土	ロームを含む	
30	円形	87×78	16	77×62	暗褐色土	ロームを含む	
31	円形	115×107	22	102×92	暗褐色土	ロームを含む	
32	円形	125×118	93	120×109	黒褐色土	ロームを若干含む	
33	円形	120×115	92	111×98	暗褐色土	ロームを含む	
34	円形	114×106	72	111×103	黒褐色土	ロームを若干含む	
35	椭円形	145×124	70	132×113	黒褐色土	ロームを若干含む	
36	円形	122×119	95	111×108	暗褐色土	ロームを若干含む	

番号	平面形	規格 (cm)			機土	備考
		検出面	深さ	底面		
37	円形	105×99	51	92×90	黒褐色土 ロームを含む	
38	円形	112×106	87	106×95	黒褐色土 ロームを含む	
39	円形	92×80	19	72×70	黒褐色土 ロームを若干含む	
40	円形	111×105	90	111×122	黒褐色土 ロームを若干含む	
41	円形	100×95	80	60×61	暗褐色土 ロームを多く含む	
42	円形	108×107	57	101×87	暗褐色土 ロームを含む	
43-1	円形 (125)×118	92	(131)×132	黒褐色土 ロームを多く含む		
43-2	円形 (88)×81	51	(83)×74	黒褐色土 ロームを若干含む		
44	円形 144×135	99	138×115	黒褐色土 ロームを若干含む		
45	円形 110×108	61	100×99	黒褐色土 ロームを多く含む		
46	円形 92×90	59	84×80	暗褐色土 ロームを若干含む		
47	円形 (95)×78	50	(73)×70	暗褐色土 ロームを多く含む		
48	円形 (120)×117	40	(110)×100	暗褐色土 ロームを若干含む		
49	円形 108×105	58	93×62	上端褐色土 ロームを多く含む 下端褐色土 ロームを若干含む		
50	円形 106×95	65	95×87	暗褐色土 ロームを多く含む		
51	円形 135×109	69	126×98	暗褐色土 ロームを多く含む		
52	円形 102×100	40	112×108	暗褐色土 ロームを含む		
53	円形 127×115	71	124×115	暗褐色土 ロームを含む		
54	円形 115×113	79	120×130	暗褐色土 ロームを含む		
55	円形 107×101	72	121×120	暗褐色土 ロームを多く含む		
56	円形 108×105	66	97×95	暗褐色土 ロームを多く含む		
57-1	円形 (106)×98	18	(95)×88	黒褐色土 ロームを含む		
57-2	円形 (115)×111	59	(110)×88	黒褐色土 ロームを含む		
58-1	円形 (86)×72	50	(90)×91	黒褐色土 ロームを多く含む		
58-2	円形 (121)×113	53	(110)×108	黒褐色土 ロームを含む	58-1土を切る	
58-3	円形 (123)×126	58	(130)×142	黒褐色土 ロームを含む	58-2土を切る	
59	円形 121×116	74	125×121	黒褐色土 ロームを若干含む		
60	円形 120×119	77	125×127	暗褐色土 ロームを含む		
61	円形 130×118	74	117×105	暗褐色土 ロームを含む		
62	円形 138×132	76	135×125	黒褐色土 ロームを若干含む		
63	円形 77×73	14	70×62	黒褐色土 ロームを含む		
64-1	円形 116×115	94	110×100	黒褐色土 ロームを多く含む		
64-2	長方形 (207)×115	105	196×122	黒褐色土 ロームを多く含む		
65	円形 117×113	105	106×111	黒褐色土 ロームを多く含む		
66	円形 (121)×113	103	(115)×102	暗褐色土 ロームを含む		
67	円形 (93)×90	40	(85)×82	黒褐色土 ロームを若干含む	66土に切られる	
68	円形 81×78	26	72×67	暗褐色土 ロームを含む		
69	円形 130×127	81	117×125	暗褐色土 ロームを含む		
70	円形 114×112	53	101×100	黒褐色土 ロームを含む	施肥土を含む	
71	円形 125×115	98	101×102	暗褐色土 ロームを多く含む		

番号	平面形	規 模 (cm)			覆 土	備 考
		横出面	深さ	底面		
72	円 形	135×128	79	60×64	黒褐色土	ロームを若干含む
73	椭円形	106×91	19	61×40	暗褐色土	ロームを多く含む
74	円 形	105×97	30	75×66	暗褐色土	ロームを多く含む
75	円 形	113×105	68	90×98	暗褐色土	ロームを若干含む
76	円 形	103×97	49	97×90	暗褐色土	ロームを若干含む
77	円 形	113×101	59	98×90	暗褐色土	ロームを含む
78	円 形	120×116	55	120×121	暗褐色土	ロームを含む
79	円 形	100×90	45	83×70	暗褐色土	ロームを含む
80	円 形	109×100	59	118×96	暗褐色土	ロームを含む
81	円 形	99×97	50	93×95	暗褐色土	ロームを含む
82	円 形	103×87	22	86×63	暗褐色土	ロームを含む
83	円 形	112×104	25	84×60	暗褐色土	ロームを含む
84	円 形	93×86	35	71×60	暗褐色土	ロームを含む
85	円 形	83×66	31	53×45	黒褐色土	ロームを含む
86	円 形	65×60	25	51×37	黒褐色土	ロームを含む
87	円 形	131×128	56	115×113	暗褐色土	ロームを若干含む
88	円 形	112×110	66	103×99	暗褐色土	ロームを多く含む
89	長方形	222×120	74	234×130	暗褐色土	ロームを多く含む
90	長方形	241×120	72	230×116	暗褐色土	ロームを多く含む
91	円 形	100×94	14	90×85	暗褐色土	ロームを含む
92	円 形	142×142	54	160×152	暗褐色土	ロームを含む
93-1	長方形	240×(125)	81	243×(120)	暗褐色土	ロームを若干含む
93-2	円 形	(110)×(110)	113	(107)×(107)	暗褐色土	ロームを若干含む
94	円 形	112×105	76	102×94	暗褐色土	ロームを若干含む
95	長方形	235×120	68	227×113	暗褐色土	ロームを含む
96	円 形	108×97	84	106×99	暗褐色土	ロームを含む
97	円 形	132×111	45	112×103	黒褐色土	ロームを含む
98	円 形	68×61	12	55×43	黒褐色土	ロームを若干含む
99	円 形	60×47	18	51×34	暗褐色土	ロームを含む
100	円 形	117×114	56	108×91	暗褐色土	ロームを含む
101	円 形	120×110	18	108×100	黒褐色土	ロームを含む
102	円 形	108×108	43	107×102	黒褐色土	ロームを含む
103	長方形	236×120	66	228×111	黒褐色土	ロームを若干含む
104	円 形	115×110	46	114×109	暗褐色土	ロームを含む
105	円 形	137×120	64	144×122	黒褐色土	ロームを多く含む
106	円 形	86×84	28	76×70	黒褐色土	ロームを含む
107	円 形	125×121	78	116×115	黒褐色土	ロームを含む
108	円 形	130×95	18	117×93	黒褐色土	ロームを含む
109	円 形	83×75	25	71×65	黒褐色土	ロームを含む
110	円 形	116×115	63	(123)×123	暗褐色土	ロームを含む

番号	平面形	規 模 (cm)			覆 土	備 考
		検出面	深さ	底面		
111	長方形	145×(115)	80	116×(115)	「暗褐色土 ロームを含む 下黒褐色土 ロームを含む」	
112	円 形	(105)×104	79	(71)×54	暗褐色土 ロームを含む	
113	円 形	113×(65)	66	115×(65)	黒褐色土 ロームを含む	
114	円 形	147×116	56	128×103	黒褐色土 ロームを含む	
115	円 形	120×120	70	110×110	黒褐色土 ロームを含む	9号住を切る
116	円 形	140×130	60	120×120	暗褐色土 ロームを多く含む	9号住を切る
117	円 形	123×113	74	114×104	暗褐色土 ロームを多く含む	
118	円 形	124×119	46	117×114	黒褐色土 ロームを含む	
119	円 形	120×103	61	123×108	暗褐色土 ロームを含む	
120	椭円形	193×83	22	182×75	黒褐色土 ロームを含む	
121	円 形	80×73	23	73×71	暗褐色土	
122	椭円形	167×112	42	160×111	暗褐色土 ロームを若干含む	
123	円 形	83×75	16	84×75	黒褐色土 ロームを含む	
124	円 形	112×105	80	105×95	暗褐色土 ロームを含む	
125	円 形	117×114	58	103×99	黒褐色土 ロームを若干含む	
126	円 形	109×109	47	97×92	暗褐色土 ロームを含む	
127	円 形	132×126	60	115×103	黒褐色土 ロームを含む	
128	円 形	115×105	40	109×98	暗褐色土 ロームを多く含む	
129	円 形	120×118	70	128×127	暗褐色土 ロームを多く含む	
130	円 形	102×96	29	92×88	黒褐色土 ロームを多く含む	
131	円 形	107×92	8	99×83	黒褐色土 ロームを多く含む	
132	円 形	71×70	6	66×65	黒褐色土 ロームを多く含む	
133	円 形	112×105	39	108×100	黒褐色土 ロームを含む	
134	円 形	107×95	32	103×92	黒褐色土 ロームを多く含む	
135	円 形	120×116	37	130×128	黒褐色土 ロームを多く含む	
136	円 形	122×120	53	123×122	黒褐色土 ロームを多く含む	
137	円 形	(130)×128	50	(120)×120	黒褐色土 ロームを多く含む	
138	円 形	120×(111)	42	114×(108)	暗褐色土 ロームを多く含む	
139	円 形	138×121	44	113×110	黒褐色土 ロームを多く含む	
140	円 形	105×100	8	93×93	黒褐色土 ロームを多く含む	
141	円 形	117×108	40	108×94	黒褐色土 ロームを含む	
142	円 形	123×120	88	128×126	暗褐色土 ロームを多く含む	
143	円 形	91×(80)	68	90×(86)	暗褐色土 ロームを多く含む	
144	円 形	115×(90)	64	121×(96)	暗褐色土 ロームを多く含む	
145	円 形	120×117	49	131×130	暗褐色土 ロームを多く含む	
146	円 形	136×128	56	144×135	黒褐色土 ロームを多く含む	
147	円 形	100×96	52	95×90	黒褐色土 ロームを多く含む	
148	円 形	140×137	79	75×75	黒褐色土 ロームを多く含む	
149	椭円形	130×99	32	110×71	暗褐色土 ロームを含む	
150	円 形	115×115	67	104×104	暗褐色土 ロームを多く含む	

番 号	平面形	規 模 (cm)			種 士	備 考
		横 出 面	深 さ	底 面		
151	円 形	131×(90)	61	127×(95)	暗褐色土: ロームを多く含む	
152	円 形	116×105	61	110×101	黒褐色土 ロームを含む	
153	方 形	98×88	12	92×84	黒褐色土 ロームを含む	
154	円 形	117×115	53	108×106	黒褐色土 ロームを含む	
155	円 形	124×117	66	132×124	黒褐色土 ロームを含む	
156	円 形	92×92	7	86×85	暗褐色土 ロームを多く含む	
157	円 形	98×97	32	89×89	黒褐色土 ロームを含む	
158	円 形	97×95	34	98×97	黒褐色土 ロームを多く含む	
159	円 形	118×118	55	107×110	黒褐色土 ロームを含む	
160	円 形	117×115	65	125×129	黒褐色土 ロームを多く含む	
161	円 形	95×92	50	87×82	暗褐色土 ロームを多く含む	
162	円 形	120×114	41	103×100	黒褐色土 ロームを含む	
163	円 形	113×105	60	103×96	黒褐色土 ロームを多く含む	
164	円 形	(85)×85	22	(70)×70	黒褐色土 ロームを多く含む	
165	円 形	(120)×120	54	(130)×137	暗褐色土 ロームを多く含む	164号を切る
166	円 形	90×89	20	80×77	黒褐色土 ロームを若干含む	
167	円 形	124×120	36	117×111	黒褐色土 ロームを含む	
168	円 形	92×90	44	80×80	黒褐色土 ロームを含む	
169	円 形	85×80	30	93×88	黒褐色土 ロームを含む	
170	円 形	129×125	53	100×64	黒褐色土: ロームを多く含む	
171	円 形	97×92	63	87×85	黒褐色土 ロームを含む	
172	円 形	102×100	22	88×84	黒褐色土 ロームを若干含む	
173	円 形	(100)×90	59	(87)×80	黒褐色土 ロームを多く含む	
174	長方形	(142)×100	19	(130)×90	黒褐色土 ロームを含む	
175	円 形	101×100	61	102×93	黒褐色土: ロームを多く含む	
176	円 形	156×150	49	143×138	黒褐色土 ロームを多く含む	
177	円 形	59×58	18	30×36	黒褐色土	
178	円 形	121×120	73	40×34	黒褐色土	
179	円 形	121×115	47	50×50	黒褐色土	
180	楕円形	120×100	—	80×60	暗褐色土: ロームを若干含む	15号住を切る
181	円 形	120×120	—	110×100	黒褐色土 ロームを若干含む	15号件を切る
182	円 形	124×120	59	111×109	黒褐色土 ロームを多く含む	
183	円 形	103×103	56	90×89	黒褐色土: ロームを若干含む	
184	円 形	114×111	98	100×97	暗褐色土 ロームを含む	
185	円 形	129×130	62	139×140	黒褐色土 ロームを多く含む	
186	円 形	124×120	63	118×115	暗褐色土 ロームを多く含む	
187	円 形	112×110	103	124×112	黒褐色土 ロームを多く含む	
188	円 形	123×120	73	124×123	黒褐色土 ロームを多く含む	
189	円 形	140×120	61	150×130	黒褐色土 ロームを多く含む	
190	円 形	120×(50)	—	130×(60)	黒褐色土 ロームを含む	

番号	平面形	規格 横 (cm)			覆土	備考
		横出面	深さ	底面		
191	円形	110×100	—	80×80	黒褐色土 ロームを含む	
192	円形	129×112	66	90×77	暗褐色土 ロームを若干含む	
193	円形	113×111	15	103×100	黒褐色土 ロームを多く含む	
194	円形	102×100	45	90×90	黒褐色土 ロームを多く含む	
195	円形	79×72	14	71×65	黒褐色土 ロームを若干含む	
196	円形	97×(55)	62	88×(50)	暗褐色土 ロームを多く含む	
197	円形	127×124	97	135×137	黒褐色土 ロームを含む	
198	円形	130×125		120×110	暗褐色土 ロームを多く含む	23号住を切る
199	円形	144×110	70	133×100	暗褐色土 ロームを多く含む	
200	円形	125×120	58	116×109	黒褐色土 ロームを含む	
201	円形	140×140	100	120×120	暗褐色土 ロームを含む	20号住を切る
202	円形	130×120	110	110×110	黒褐色土 ロームを含む	22号住を切る
203	円形	120×110	90	100×100	黒褐色土 ロームを含む	22号住を切る
204	円形	130×120	—	120×110	黒褐色土 ロームを含む	23号住を切る
205	円形	96×(70)	41	109×(73)	黒褐色土 ロームを若干含む	
206	円形	78×60	19	55×38	黒褐色土 ロームを多く含む	
207	円形	141×100	32	121×60	暗褐色土 ロームを含む	
208	円形	108×105	57	80×78	暗褐色土 ロームを含む	23号住を切る
209	円形	98×90	43	70×63	暗褐色土 ロームを含む	
210	円形	132×130	30	124×120	黒褐色土 ロームを含む	3号住を切る
211	円形	140×130	36	128×120	黒褐色土 ロームを含む	12号住を切る
212	円形	140×120	80	120×120	暗褐色土 ロームを含む	12号住を切る
213	円形	98×90	--	85×80	黒褐色土 ロームを含む	11号住を切る
214	円形	130×120	50	110×100	黒褐色土 ロームを含む	15号住を切る
215	長方形	240×125	90	242×130	黒褐色土 ロームを多く含む	
216	長方形	238×135	90	240×135	黒褐色土 ロームを多く含む	
217	長方形	238×130	90	240×130	黒褐色土 ロームを多く含む	
218	長方形	240×130	90	242×130	黒褐色土 ロームを多く含む	
219	長方形	210×138	90	220×140	黒褐色土 ロームを多く含む	
220	円形	110×100	55	65×60	暗褐色土 ロームを多く含む	
221	梢円形	150×70	70	60×50	黒褐色土	9号住を切る
222	円形	120×(80)	14	100×(70)	暗褐色土	24号住を切る

## IV章 まとめ

上北田遺跡の調査によって発見した成果のうち遺構は、縄文時代前期前半の住居址22軒+2軒、墓坑数基と平安時代最末期の住居址3軒および中世の掘立柱建物址2軒・円形～長方形の土坑222基・柱列痕・歯痕・粘土貯藏穴5・汐様の溝状遺構1本などであった。

遺物は、縄文時代前期前半の原形に復元できた上器16個と多量の破片・石器類の他炭化材、クリ・ミズナラ・カヤ・クヌギ・バラなどの炭化堅果など膨大な量に上った。これらの資料について若干の考察を加えておきたいと思う。

まず、遺構で注目したいのは住居の配置、即ち、個々の住居よりも集落構成にあると思う。22軒+2軒、計24軒とは、独立した22軒と、3号住居址にすっぽり重複した27号住居址と20号住居址の拡張前の26号住居址とを加えたものである。これらの住居址は、位置的に三つの集團に分けることが可能である。第1集團は、2・27・4・5・8の5軒、第2集團は、7・6・9・10・11・15・13に12を加えた8軒、第3集團は、17～26の10軒とかなり離れて孤立している16号住居址である。

次に時間差であるが、第1・2集團では、各々の住居址の間隔と配置がほぼ適正で、土器による時間差も現状ではほとんど感ぜられない。しかし、では、この2集團13軒が同時に存在したかとなると一寸疑問が残る。感じとしては、第2集團の方がやや新しい気がする。第3集團は極めて狭い範囲に10軒が集中していたが、重複していたのは20と26および24と25の2組だけであった。これらを重複と上器による新旧関係を考慮して整理すると、次のような三時期に分割できた。1期=19・26・21の3軒、2期=17・22・24の3軒、3期=18・20・23・25の4軒ということになった。したがって、これらの関係を時間差を含めて整理すると、第1集團がこの地に住みついた開拓者で、暫時下方へ第2集團～第3集團へと移行したと解釈するのが現時点での適切な方法であろう。

統いて遺物に移ろう。遺物のうち土器は、長野県内の中越・阿久遺跡などの資料と大同小異でその組合せはほとんど変わらない。ただ、それぞれの特徴を持つ土器の量の差ぐらいである。石器は、多くの紙面を割いて図示した如く、この時期の特徴を具備した有るべき器種がすべて揃っている上に、土器と同じく混じり気なく純度は100%に近く極めて高い。

また、火災によって消失した17・18号住居址からは、炭化材のほか、多量の堅果類が検出できた。これらは、蒸焼きの状態で床面の焼けた凹みや床面上20cm位までの間でみつかった。これらの他、期待していた鱗果類の検出はなかった。

以上のほか、14号住居址の平安時代から鎌倉時代かの帰属の問題、汐様の溝状遺構・円形、長方形上坑の使用目的の解明などなど、上北田遺跡の抱える課題はあまりにも大きすぎて、時間的にも予算面でも本報告書で、その全貌を解明するには荷が重すぎた。今後、時と機会をとらえて順次に解明していくなければならない。

図1



遺跡位置図 1 / 50,000

- 1、上北田遺跡 2、新居道上遺跡 3、上北田3遺跡 4、根古屋遺跡  
5、星敷平遺跡 6、板橋遺跡 7、坂下遺跡 8、所帶I II遺跡

図2

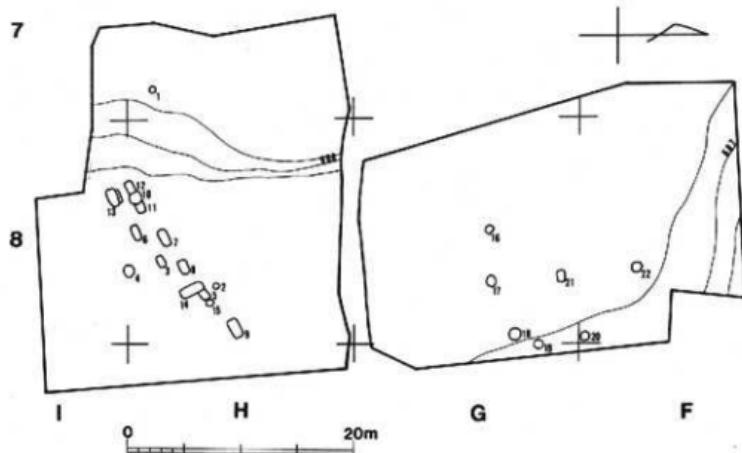
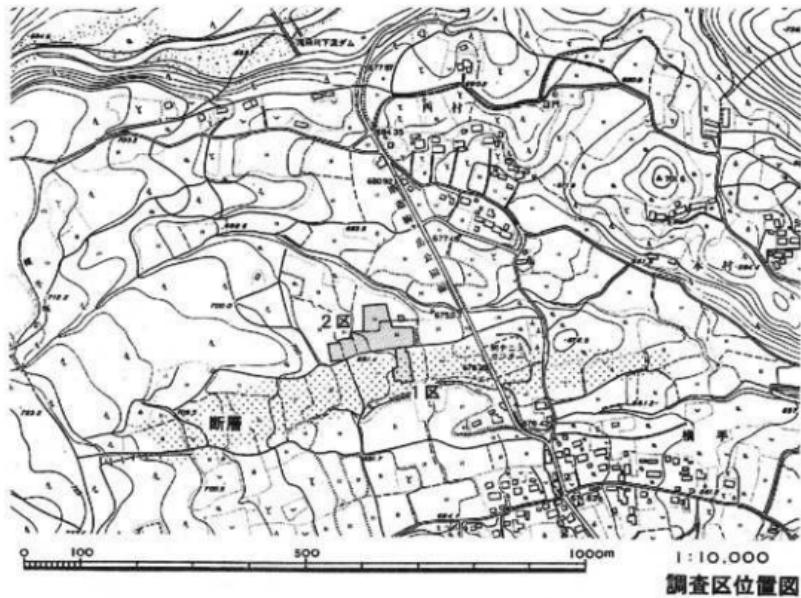


図3 1区全測図 1 / 500

図4 2区全測図 1/500 (※番号のみは土坑)

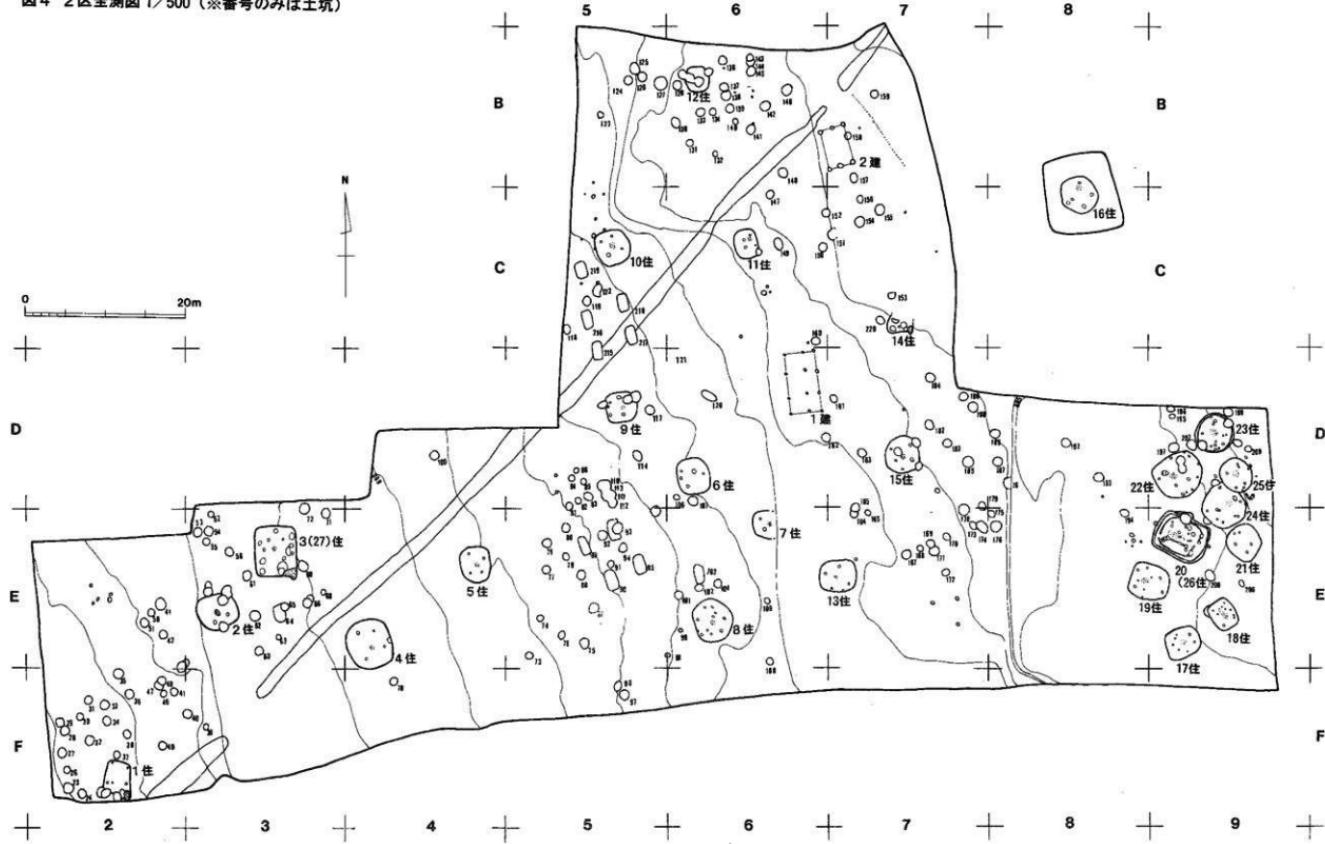


図5 2号住居址（水糸高= 691.7）

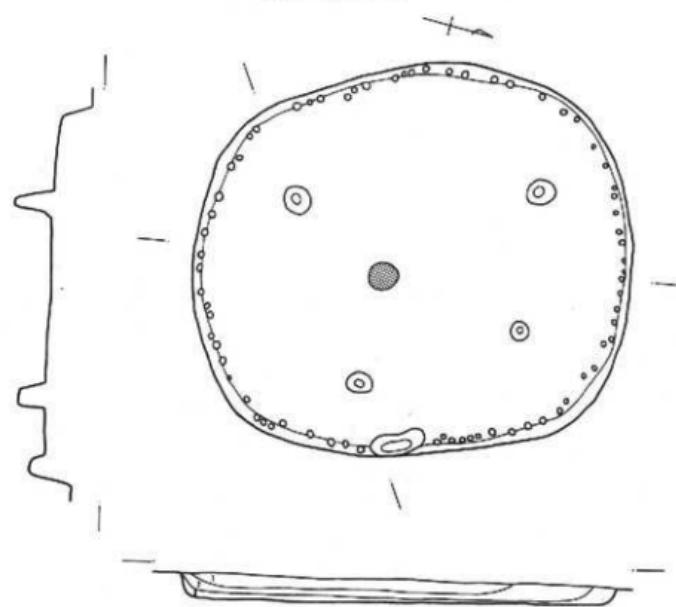
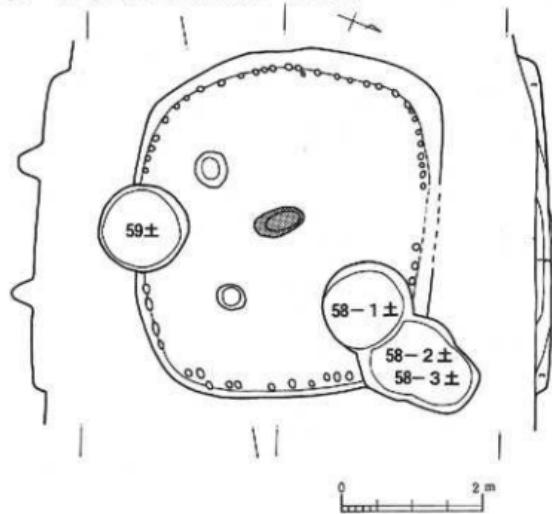


図6 4号住居址（水糸高= 690.7）

図7 5号住居址（水糸高= 689.7）

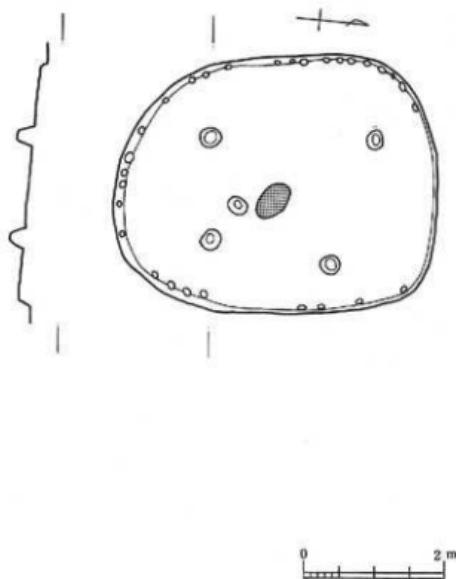


図8 6号住居址（水糸高= 690.0）

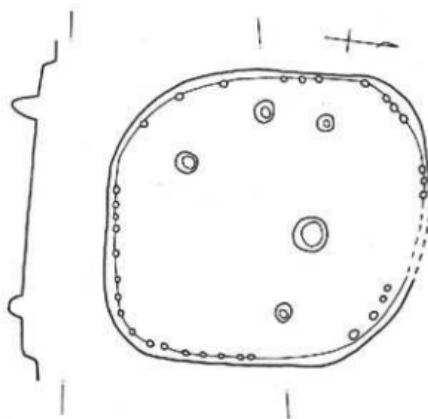


图9 7号住居址（水系高= 687.8）

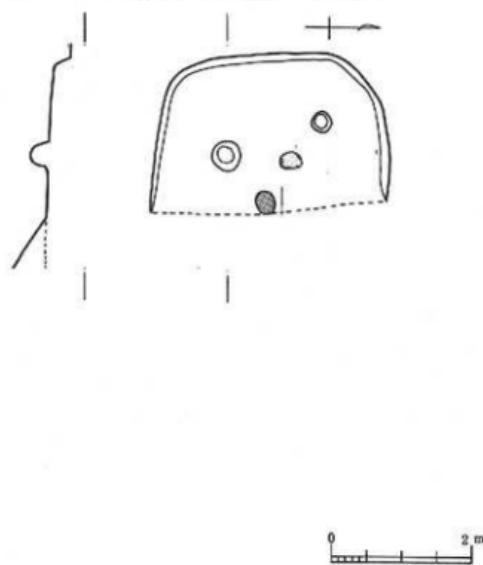


图10 8号住居址（水系高= 688.2）

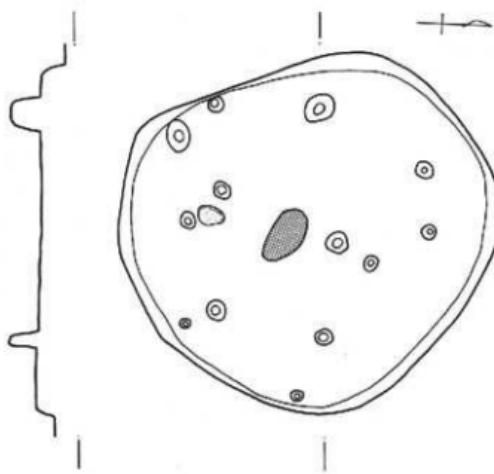


図11 9号住居址（水糸高 = 688.6）

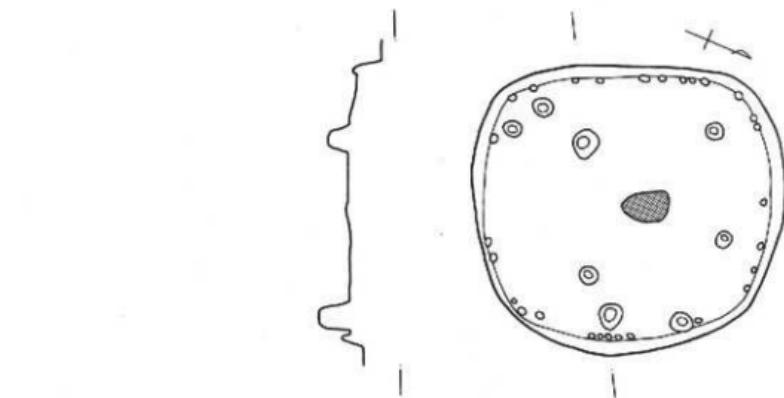
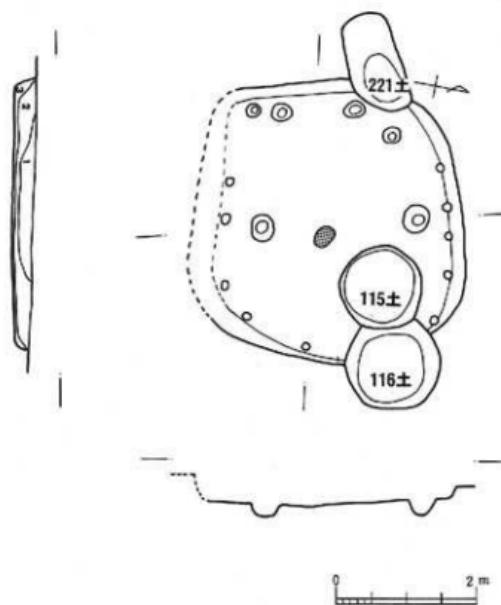


図12 10号住居址（水糸高 = 688.3）

図13 11号住居址 (水糸高 = 687.2)

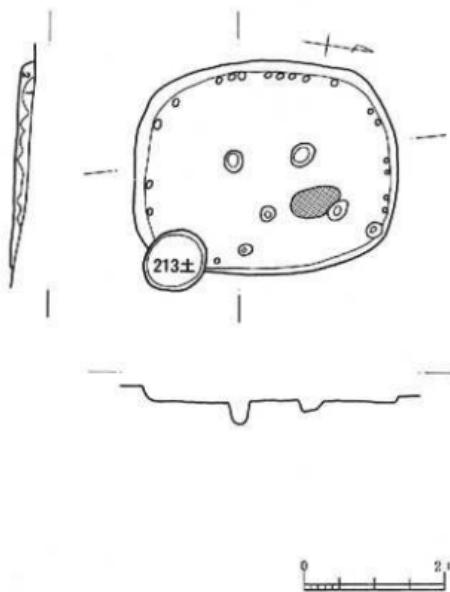


図14 12号住居址 (水糸高 = 686.8)

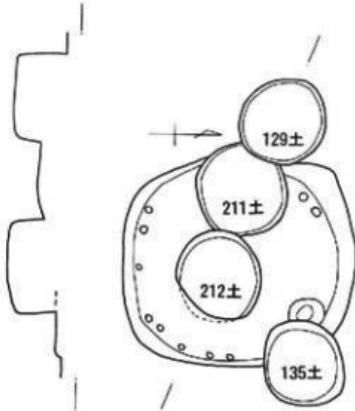


图15 13号住居址（水系高= 687.1）

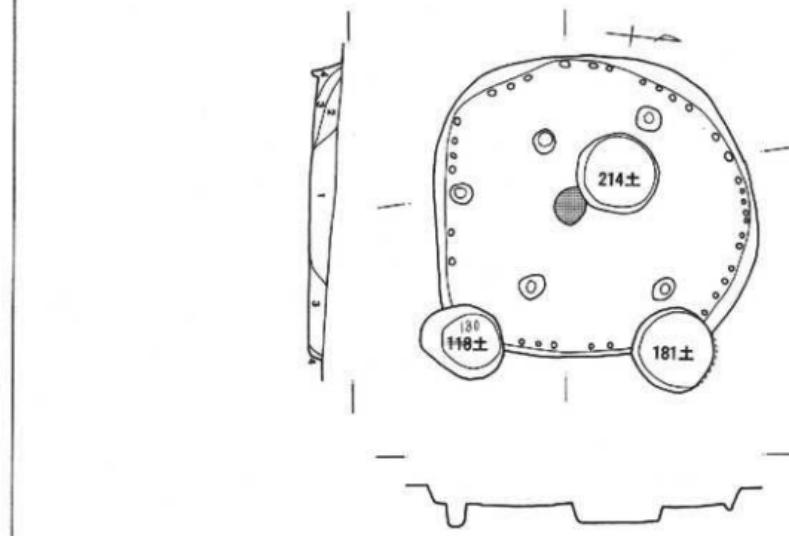
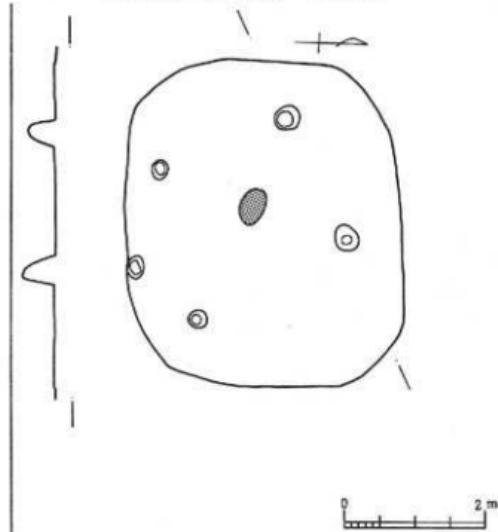


图16 15号住居址（水系高= 686.9）

图17 16号住居址（水系高 = 685.3）

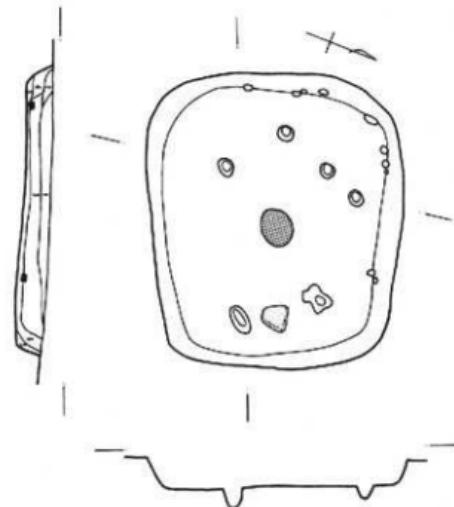
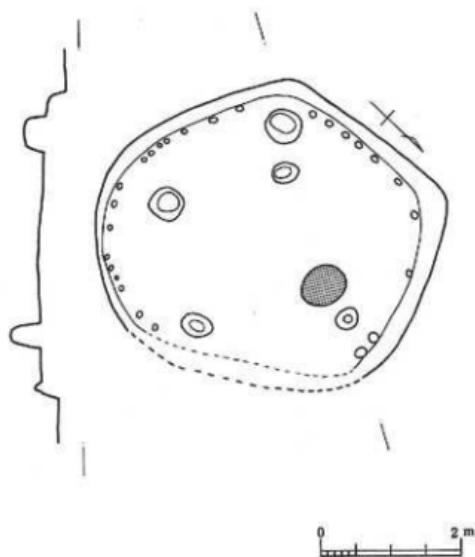


图18 17号住居址（水系高 = 684.8）

图19 18号住居址（水系高= 684.5）

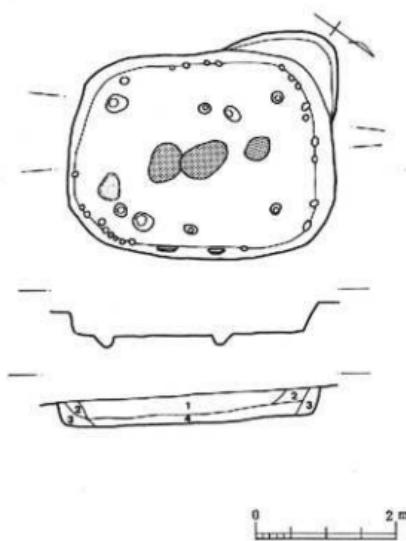


图20 19号住居址（水系高= 685.0）

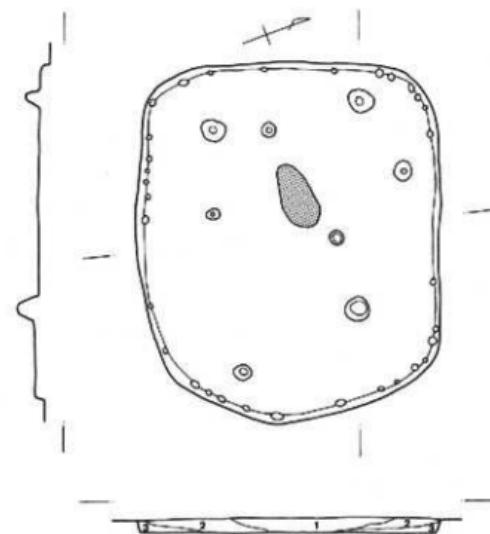


图21 20号住居址 (水系高 = 684.8)

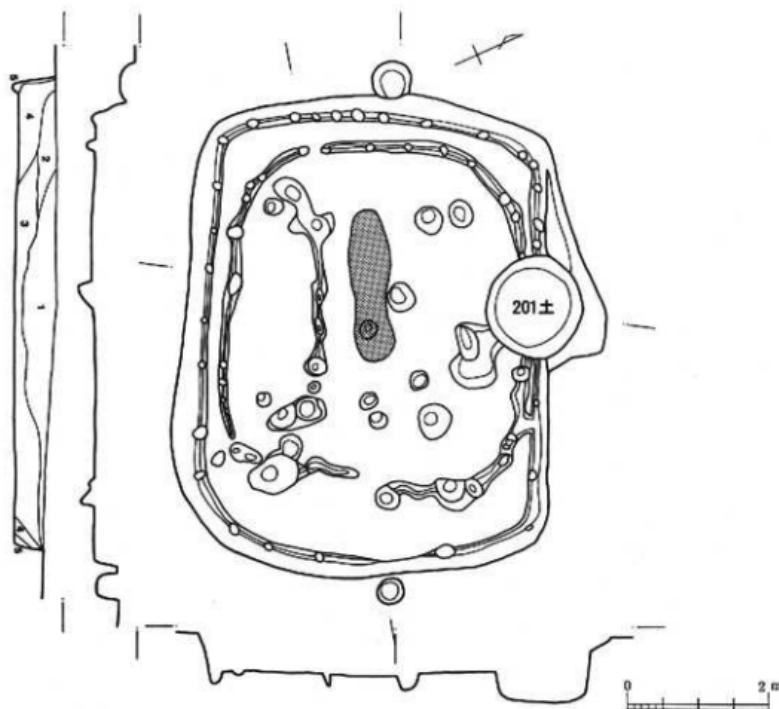


图22 21号住居址 (水系高 = 684.5)

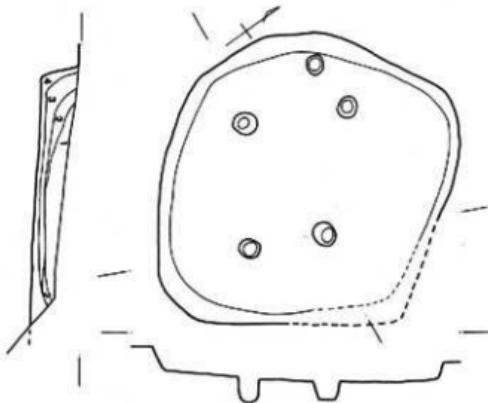


図23 22号住居址（水糸高 = 684.8）

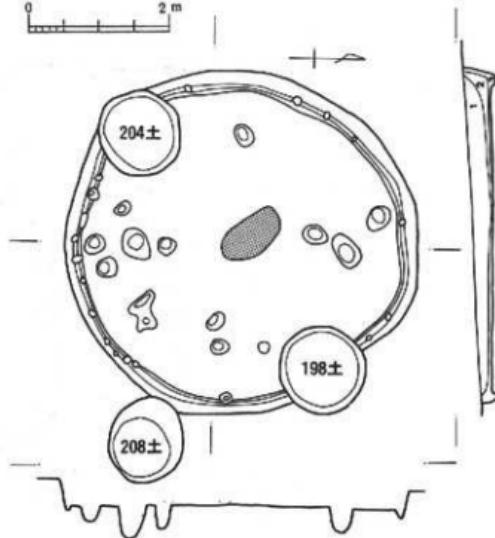
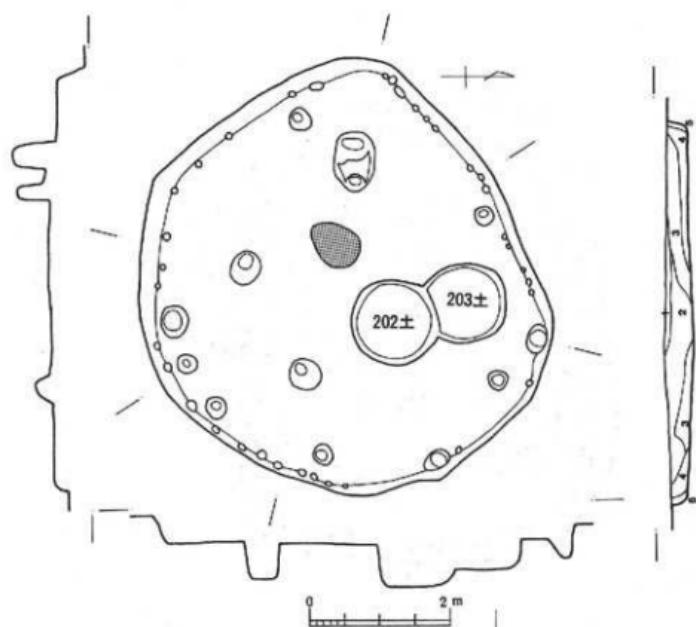


図24 23号住居址（水糸高 = 684.3）

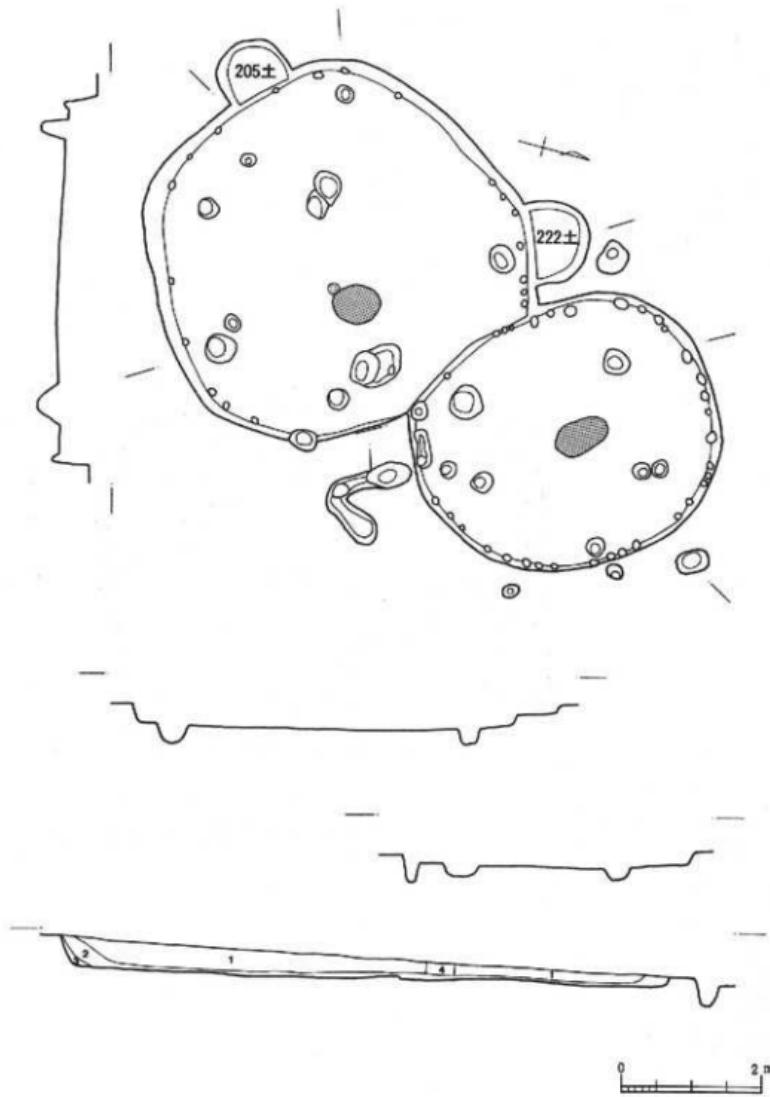


图25 24号在25号台住居址（水系高= 684.7）

図26 1号住居址 (水糸高= 692.7)

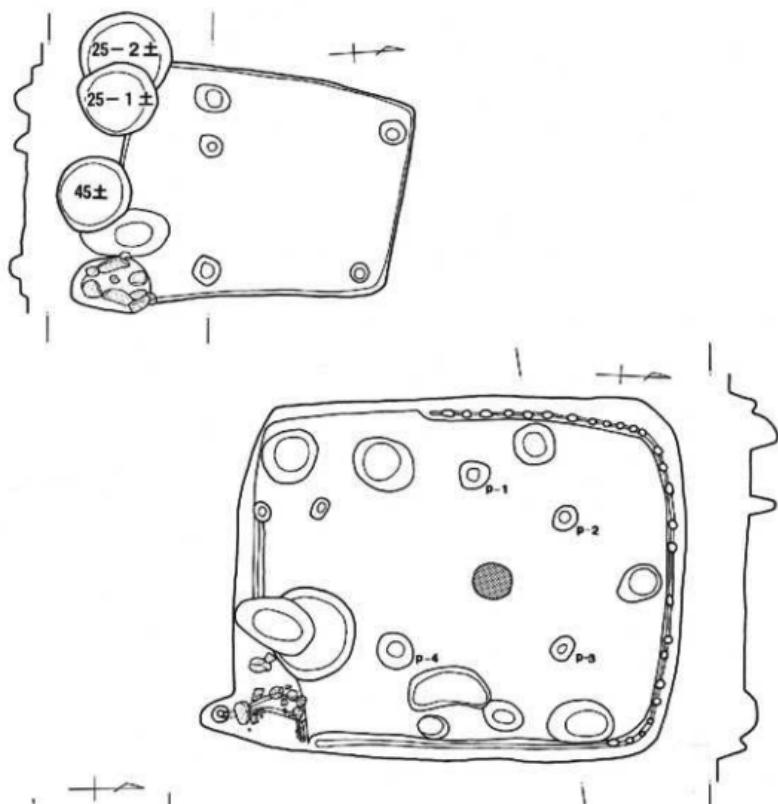


図27 3号住居址 (水糸高= 691.1)



0 2 m

図28 14号住居址 (水糸高= 686.5)

図29 1号掘立柱建物址（水糸高 = 687.0）

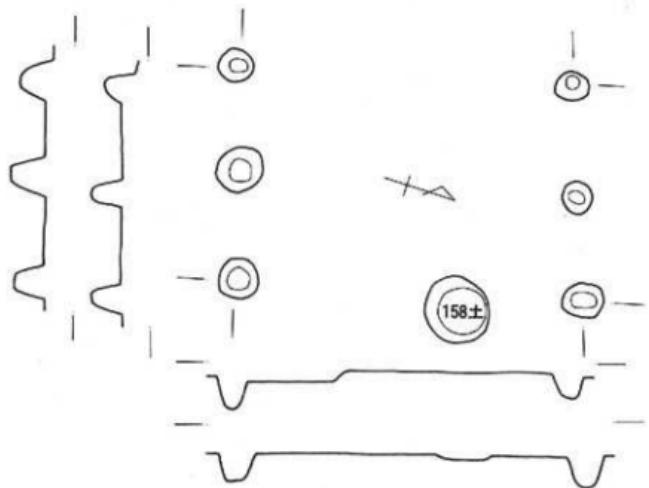
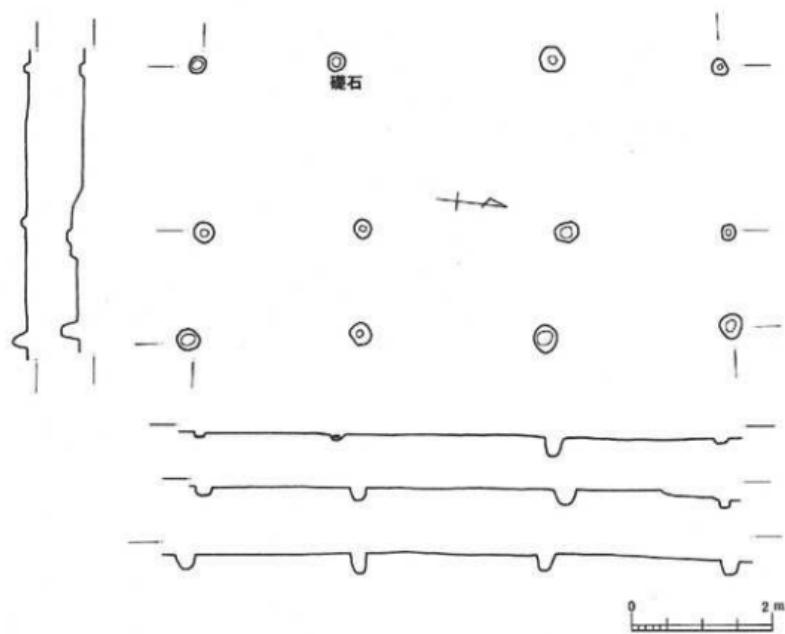


図30 2号掘立柱建物址（水糸高 = 686.2）

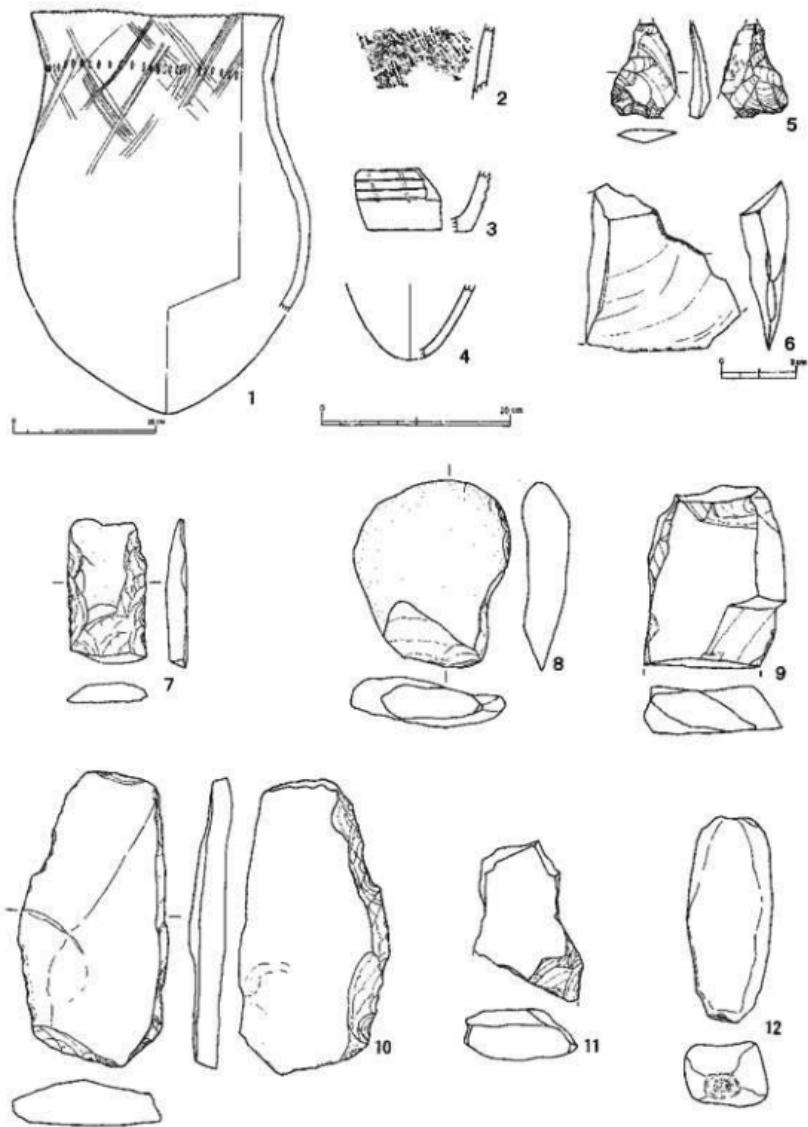


図31 2号住居址出土遺物1/3 (1は1/4 5、6は2/3)

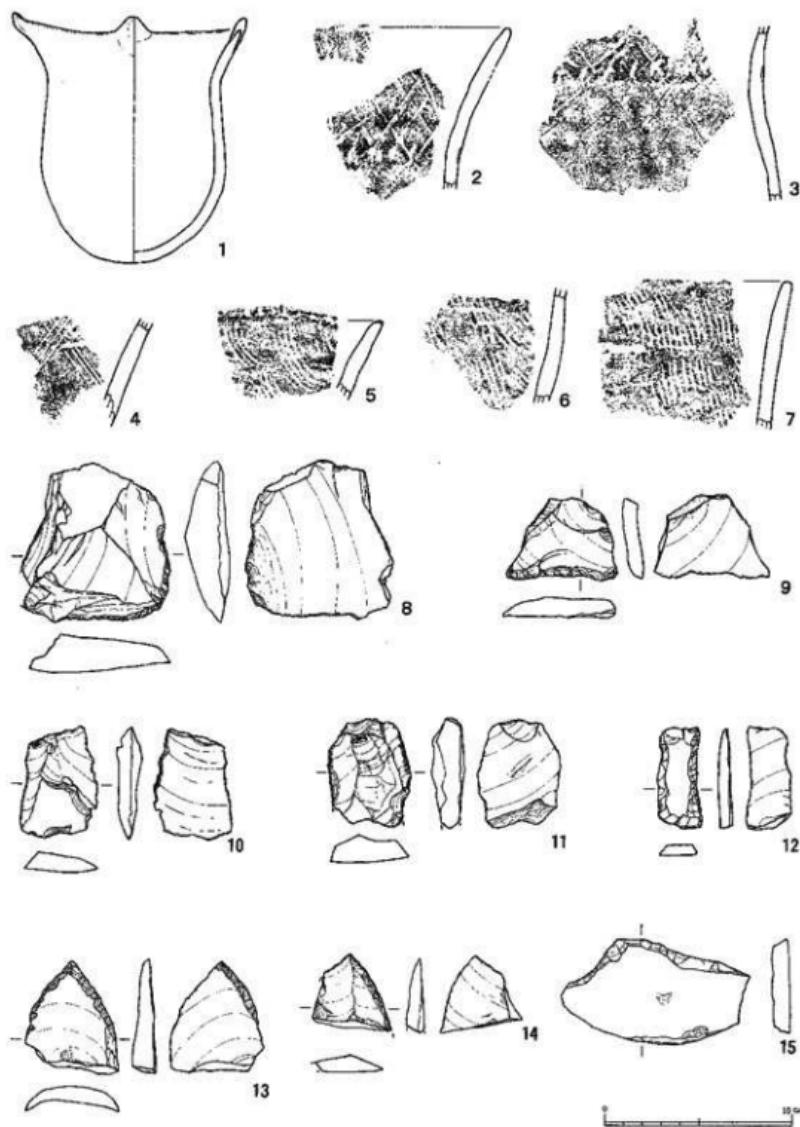


图32 4号住居址出土遗物①1/3

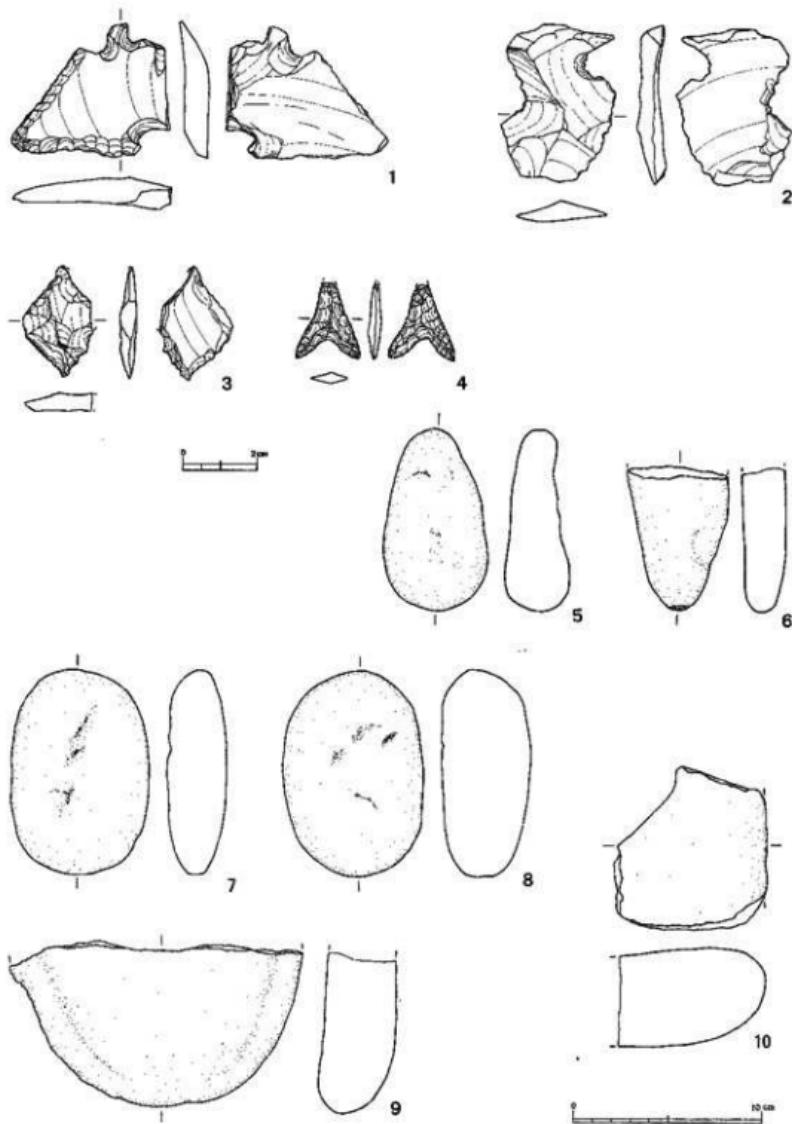


図33 4号住居址出土遺物②1/3 (1~4は2/3)

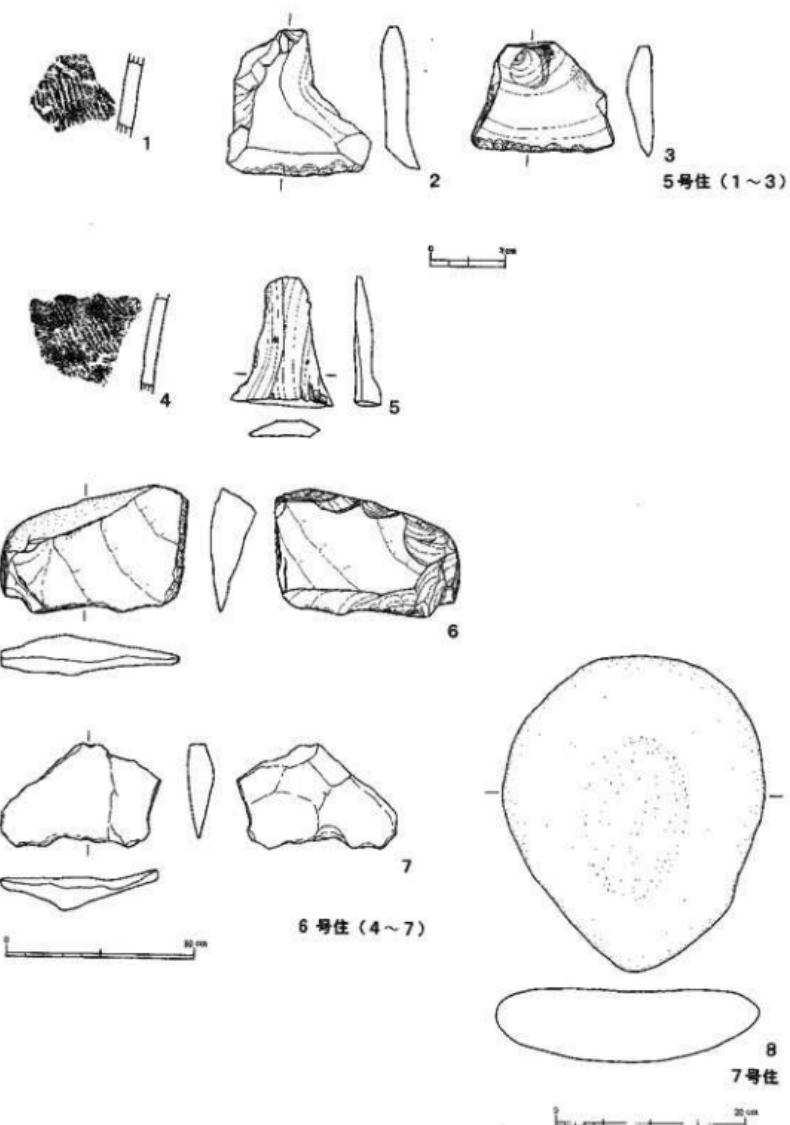


図34 5、6、7号住居址出土遺物 1/3(2、3、5は2/3 8は1/6)

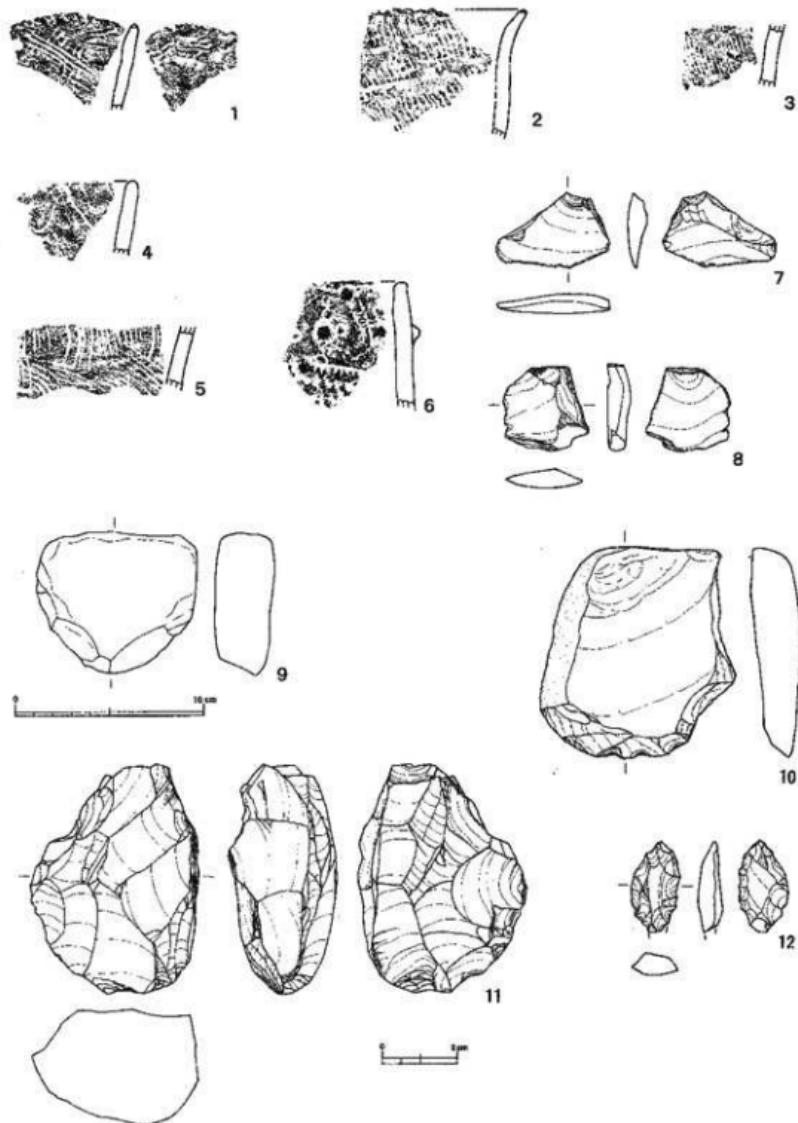


図35 8号住居址出土遺物 1/3 (11、12は2/3)

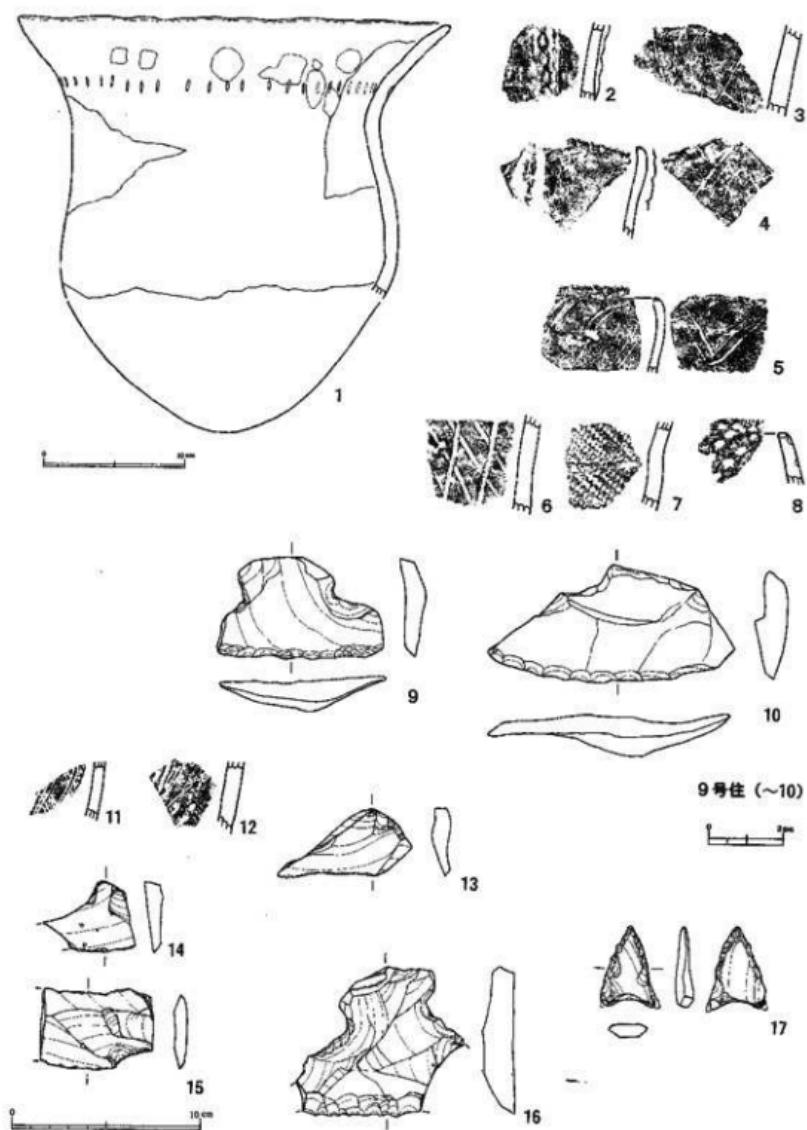
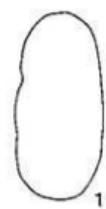
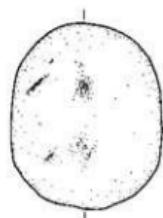


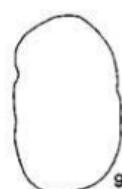
図36 9、10号住居址出土遺物1/3 (1は1/4 9、10、16、17は2/3)



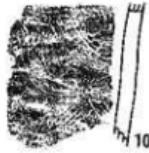
10号住 (1.2)



8



11号住 (3~9)



16

15号住 (10~16)

図37 10、11、15号住居址出土遺物 1/3 (8は2/3)

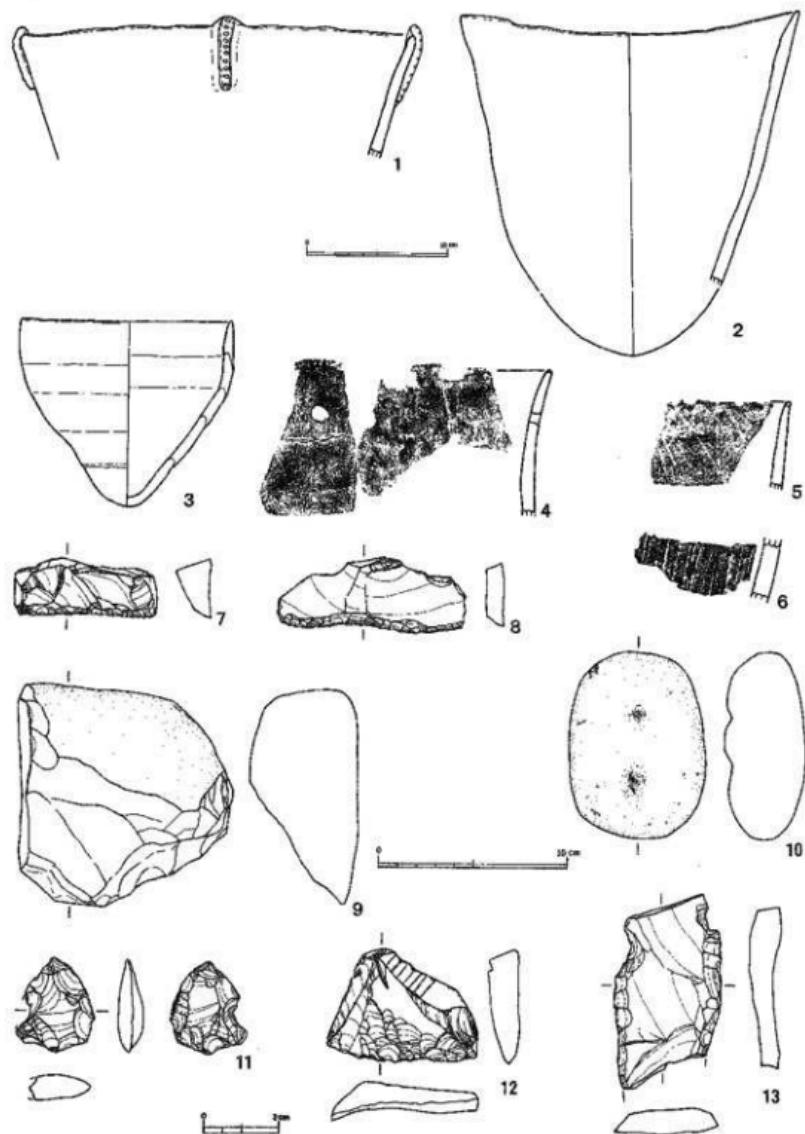


図38 16号住居址出土遺物1/3 (1、2は1/4 11~13は2/3)

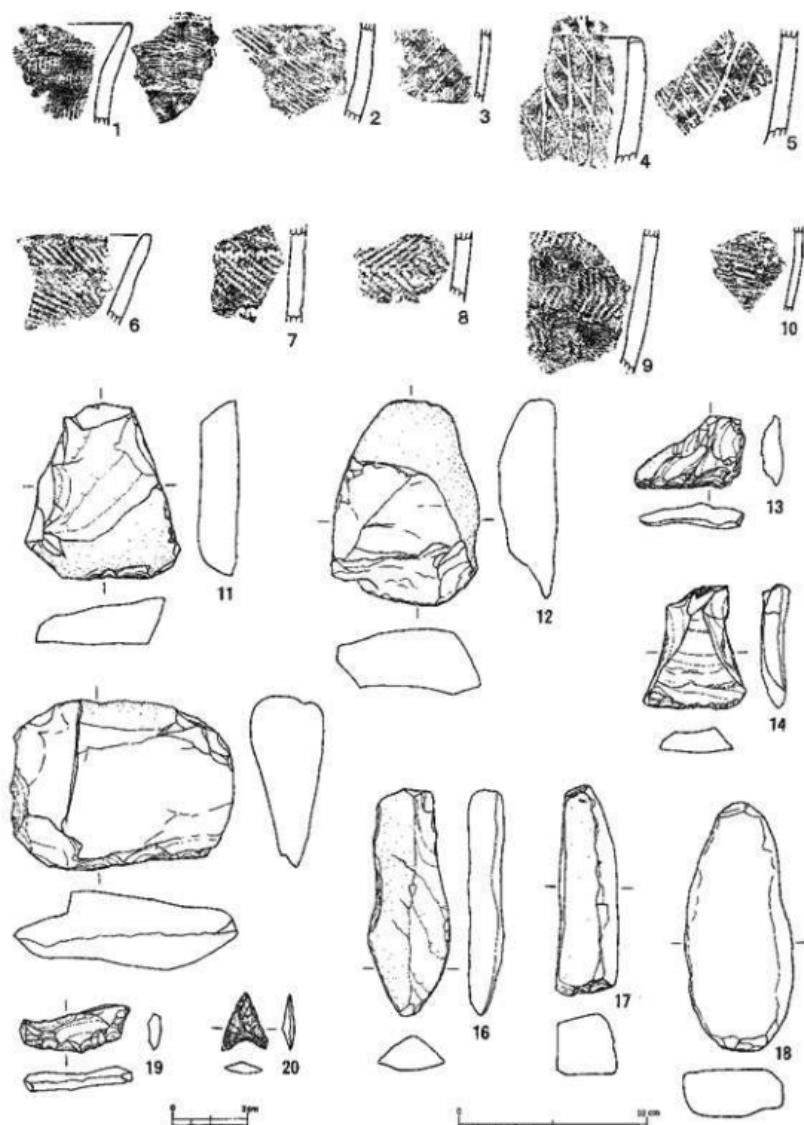


図39 17号住居址出土遺物 1/3 (19、20は2/3)

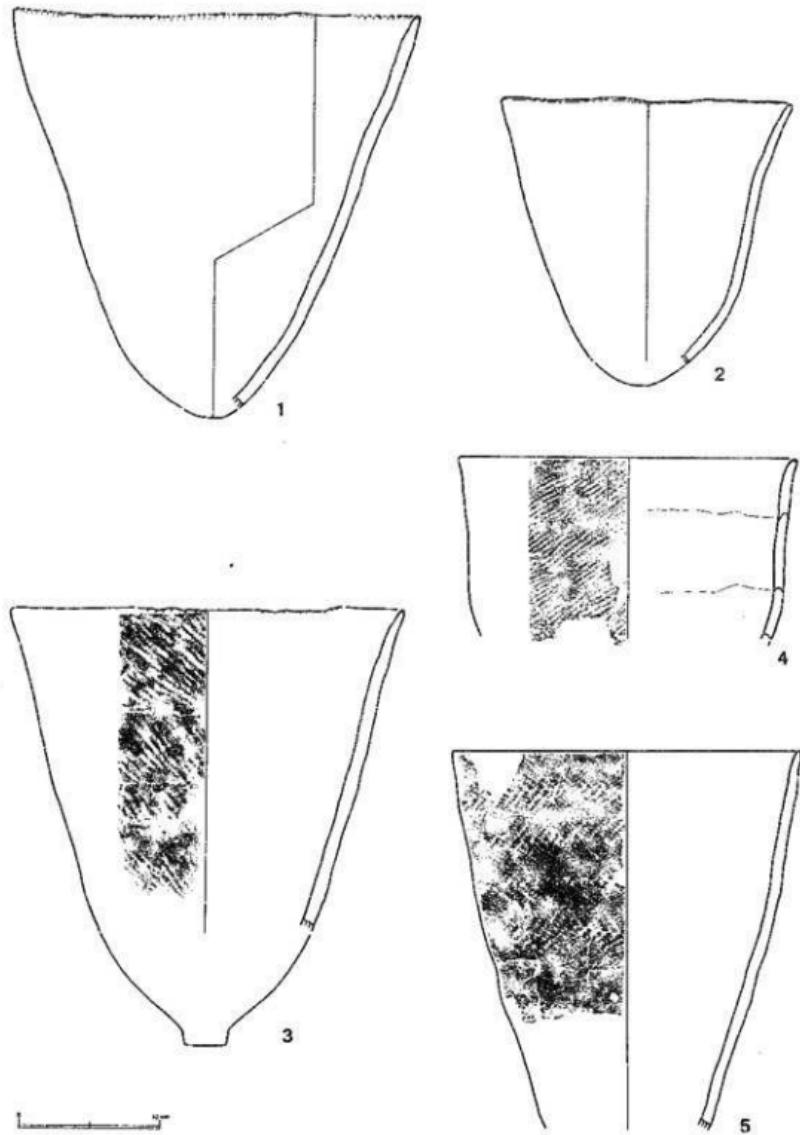


图40 18号住居址出土遗物①1/4

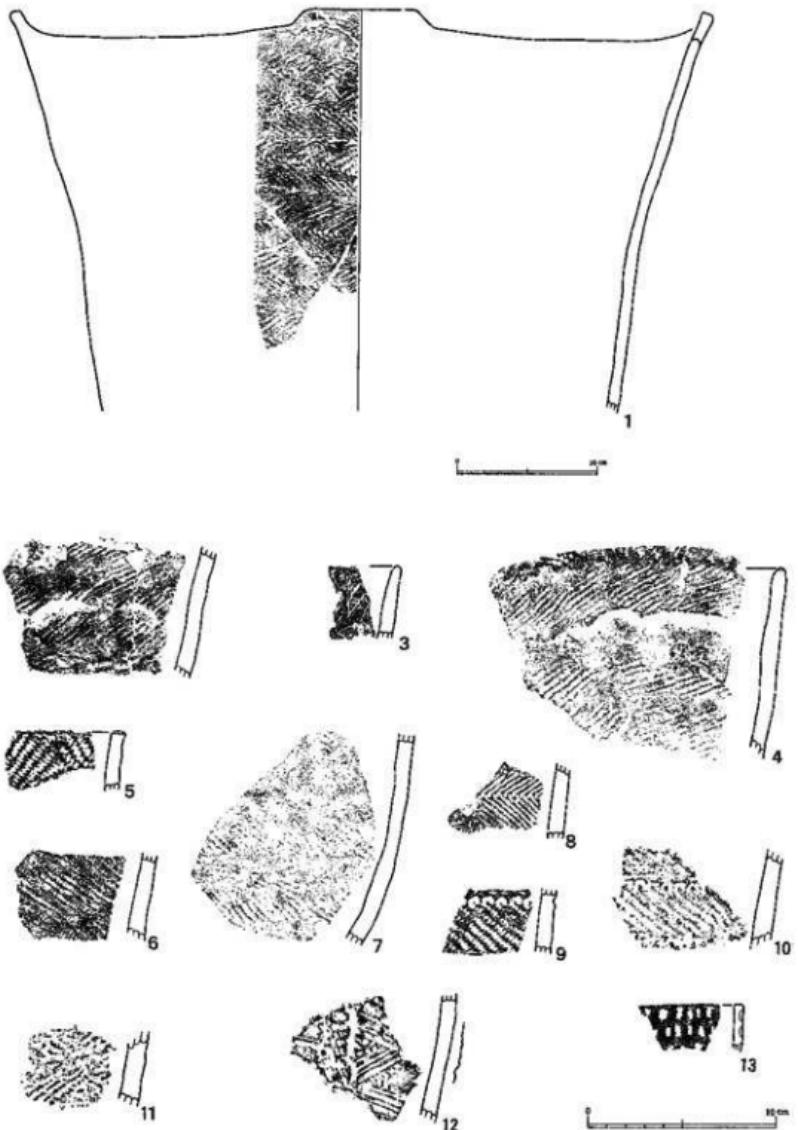


図41 18号住居址出土遺物②1/3 (1は1/4)

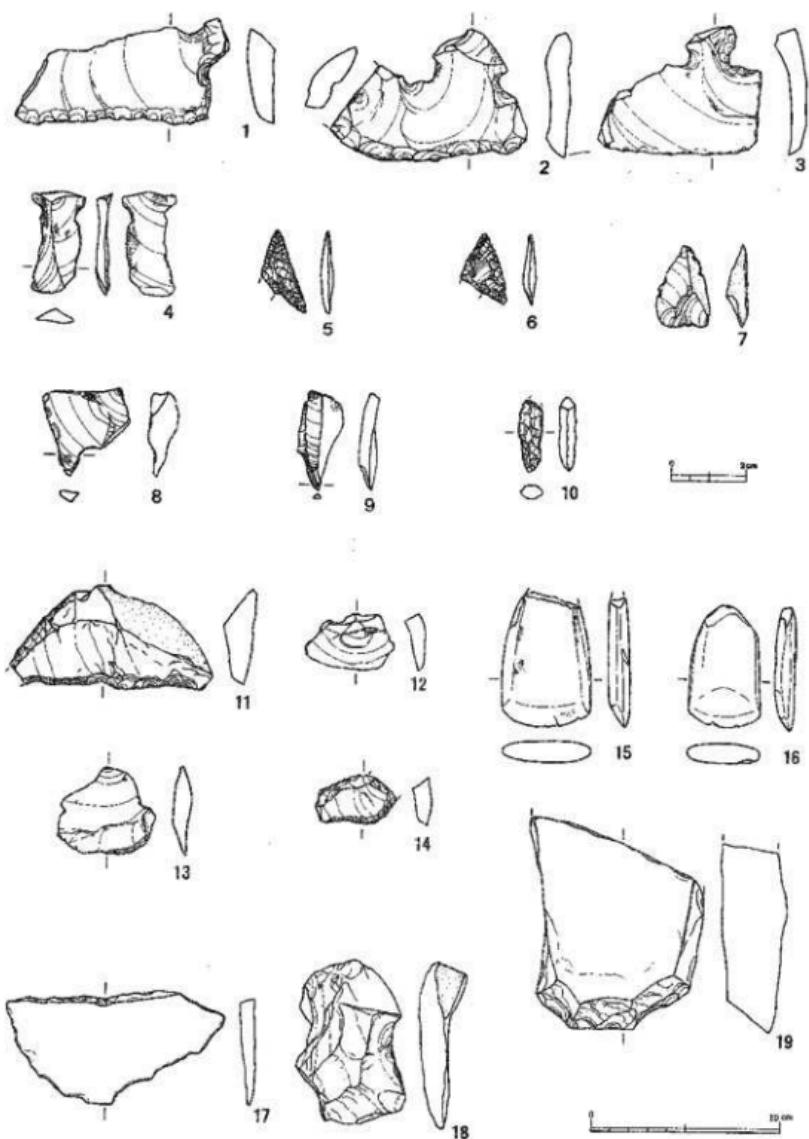


图42 18号住居址出土遺物③1/3 (1~10は2/3)

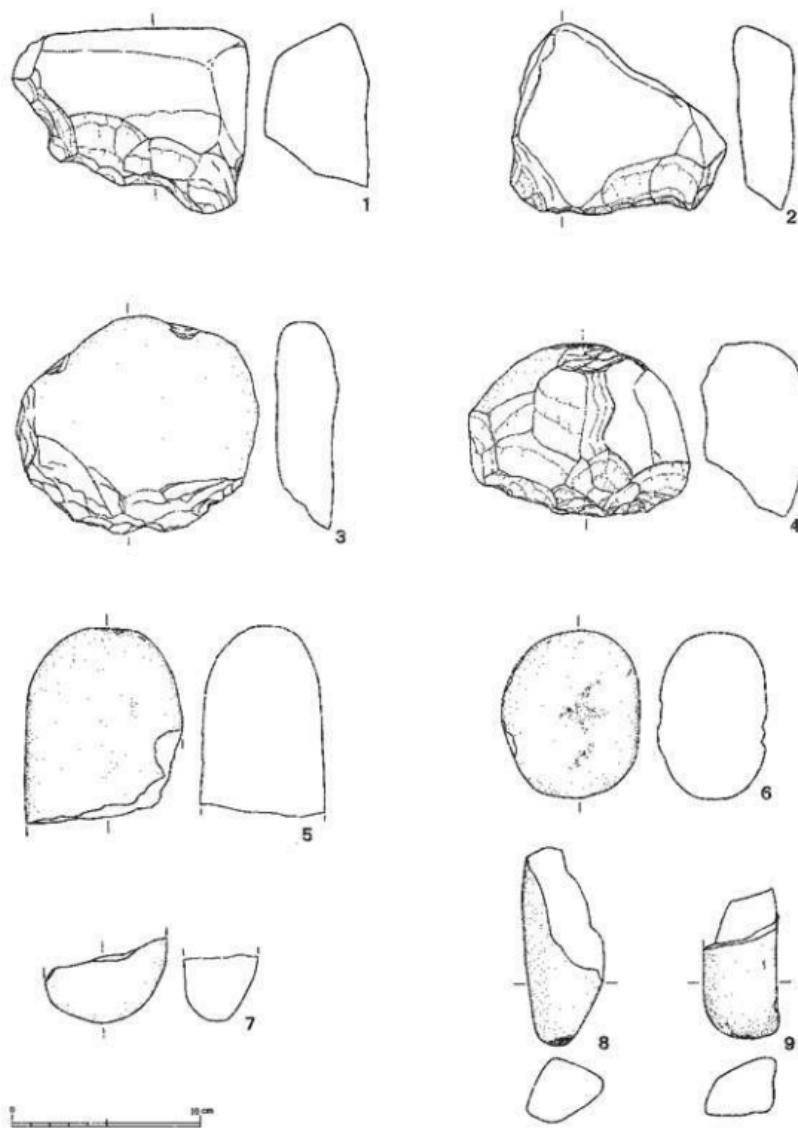


圖43 18号住居址出土遺物④ 1/3



図44 19号住居址出土遺物1/3 (1は1/4 11~13は2/3)

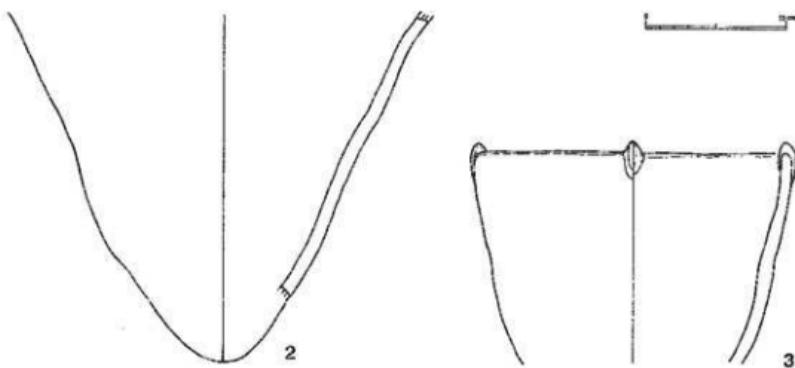
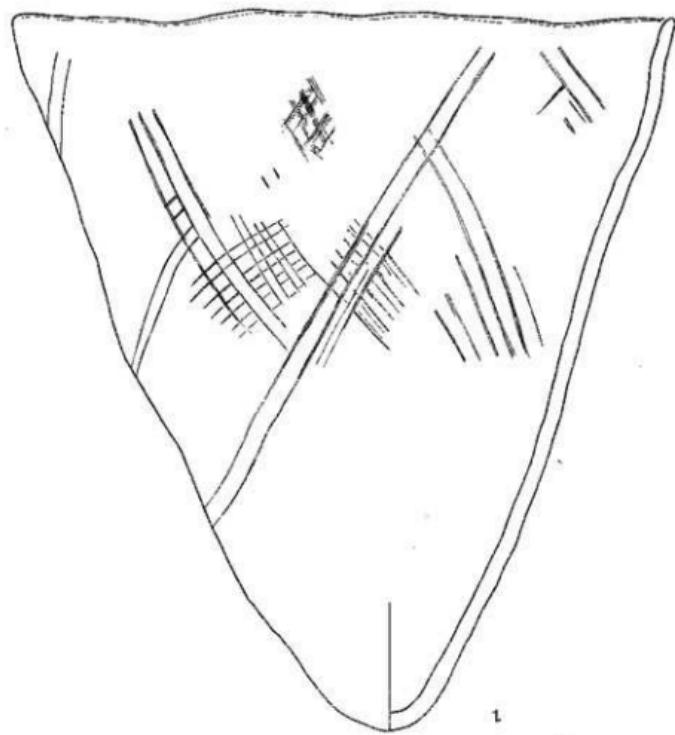


圖45 20號住居址出土遺物① 1/4

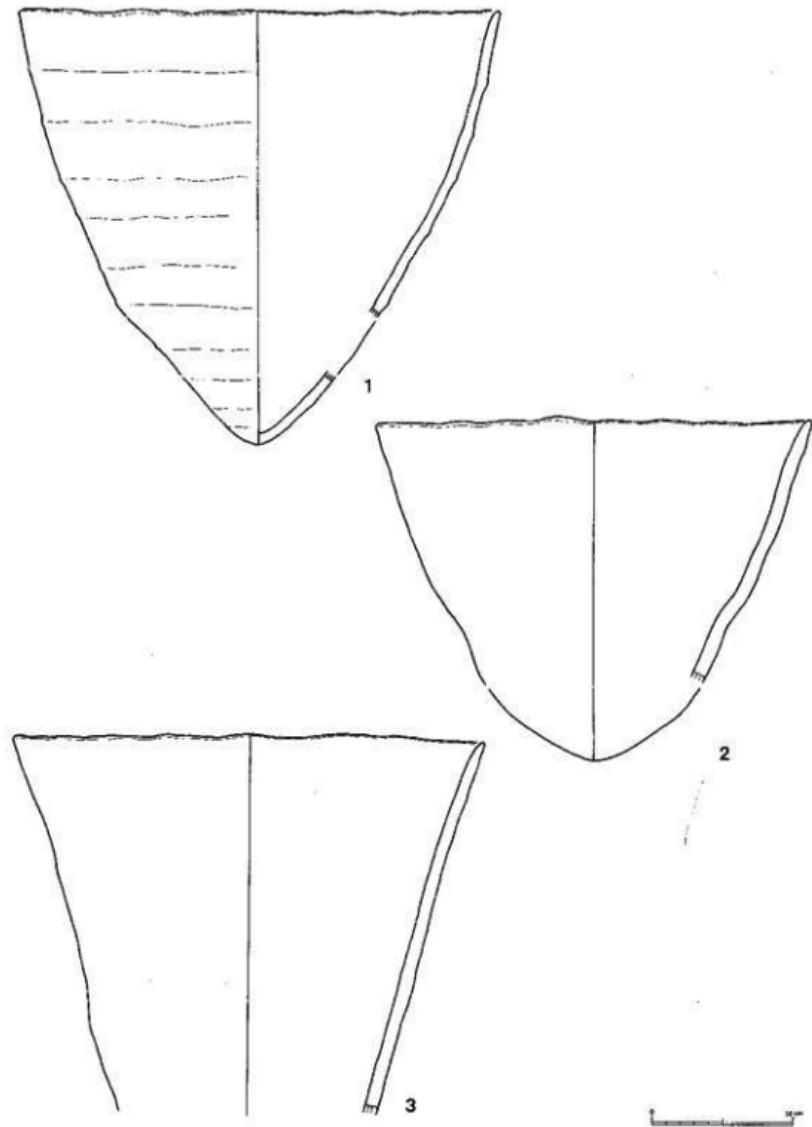


图46 20号住居址出土遗物②1/4

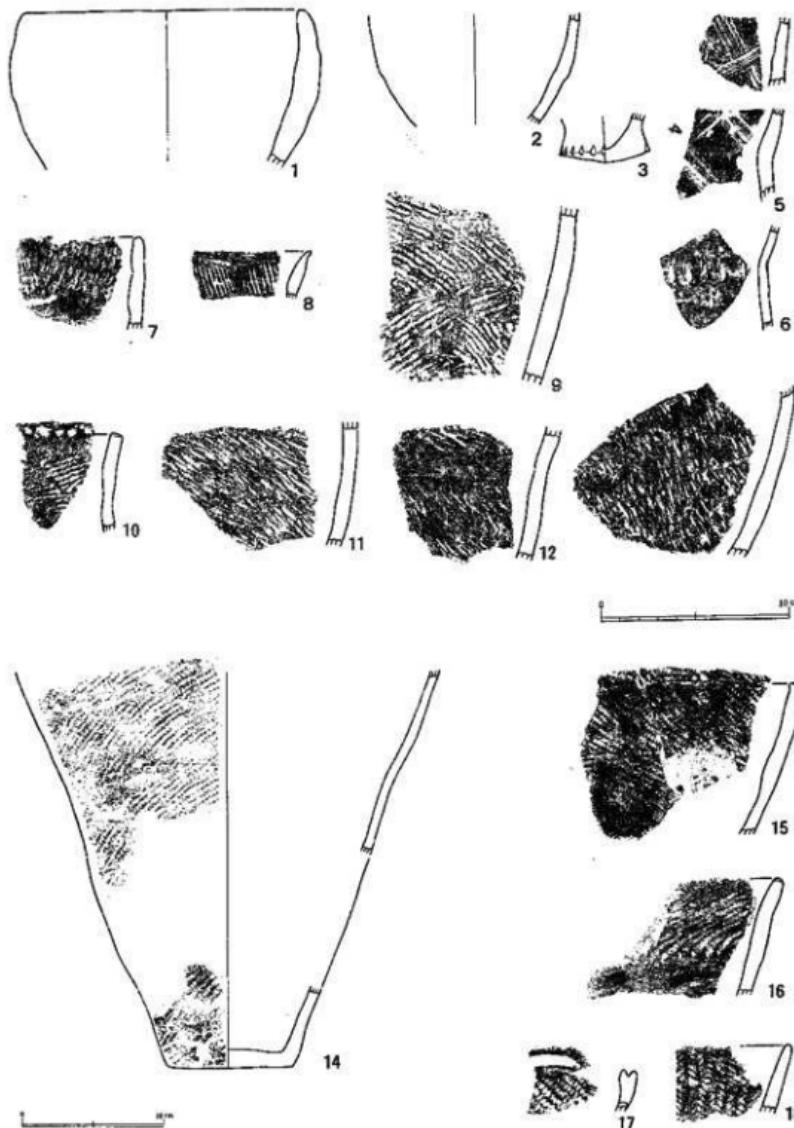


図47 20号住居址出土遺物③1/3 (14は1/4)

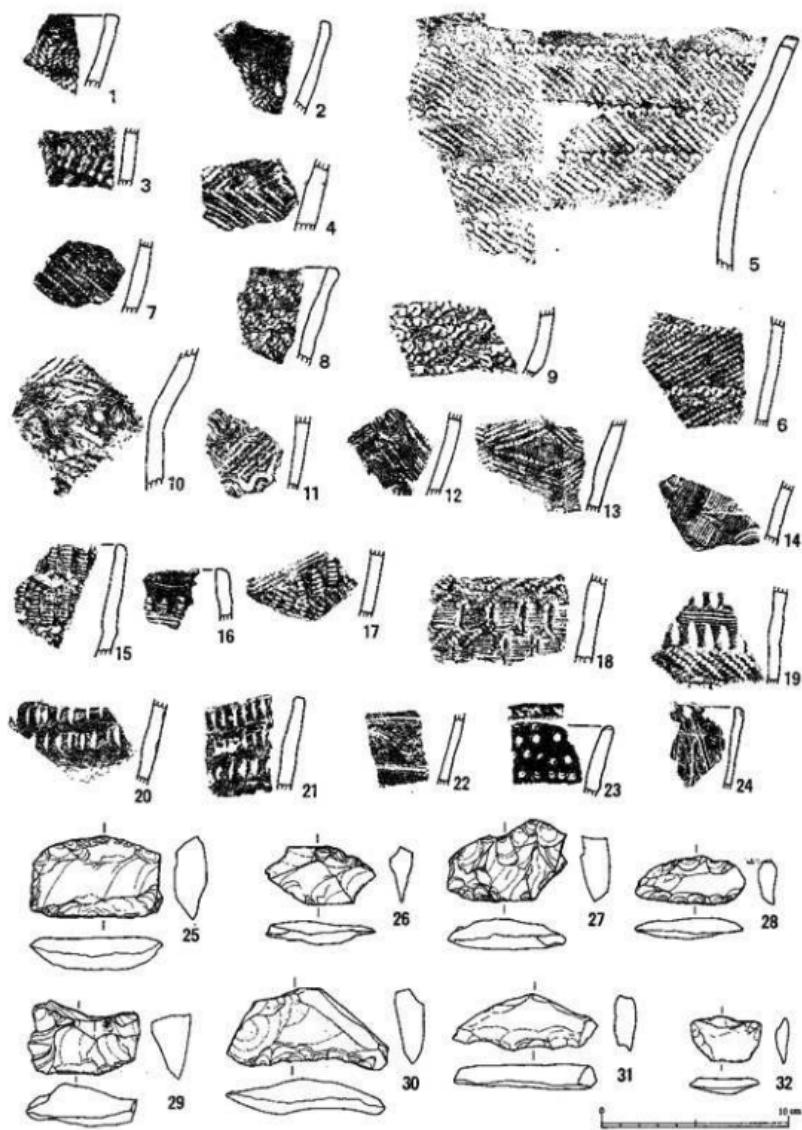


图48 20号住居址出土遗物④ 1/3

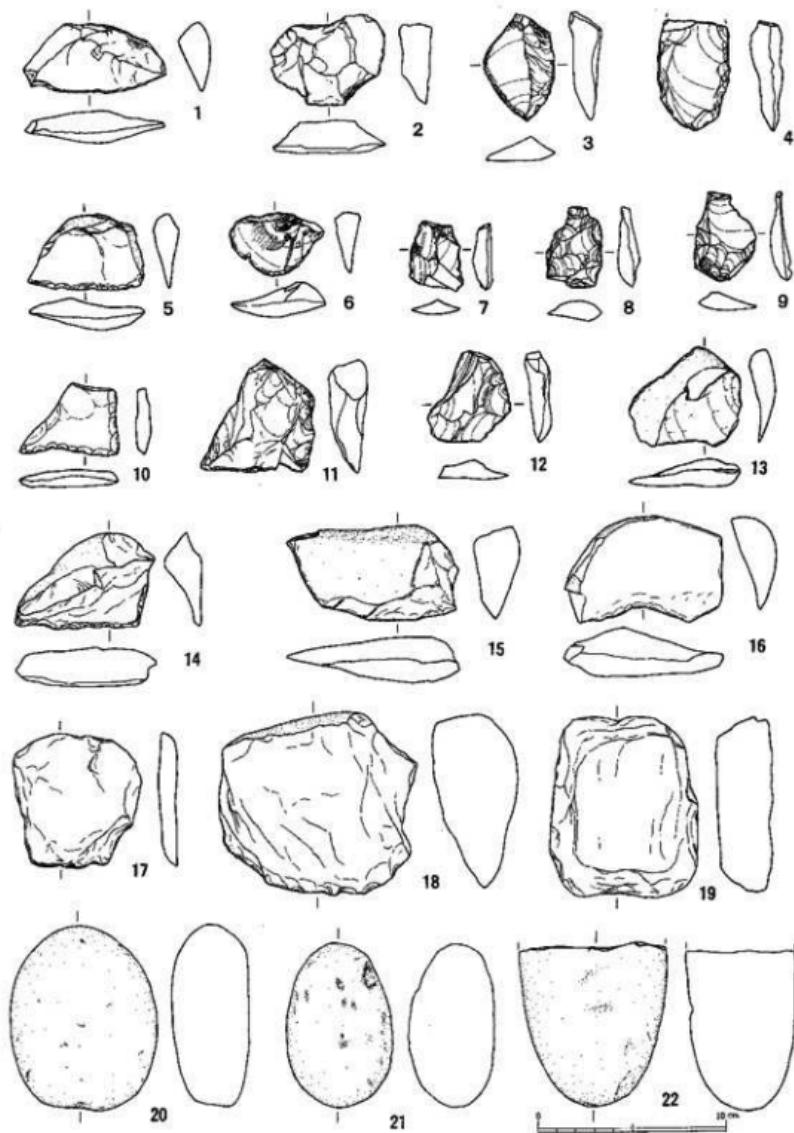


图49 20号住居址出土遺物⑤ 1/3

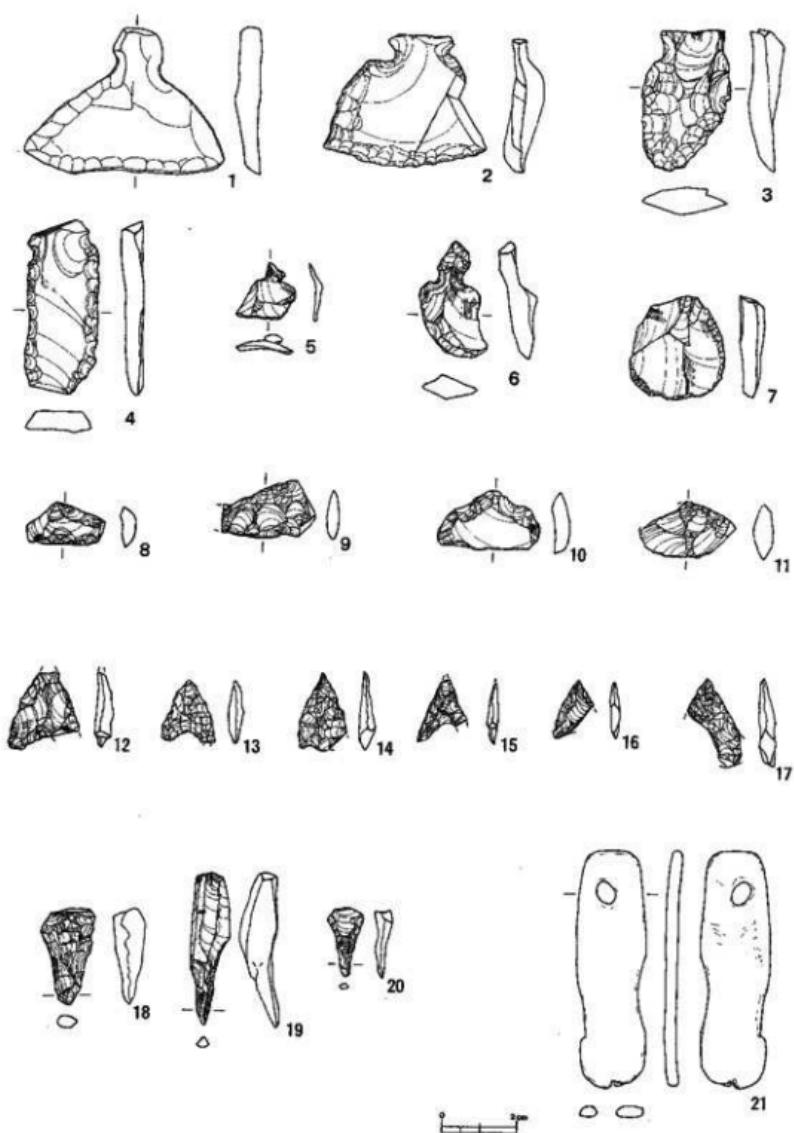


图50 20住居址出土遗物⑥2/3

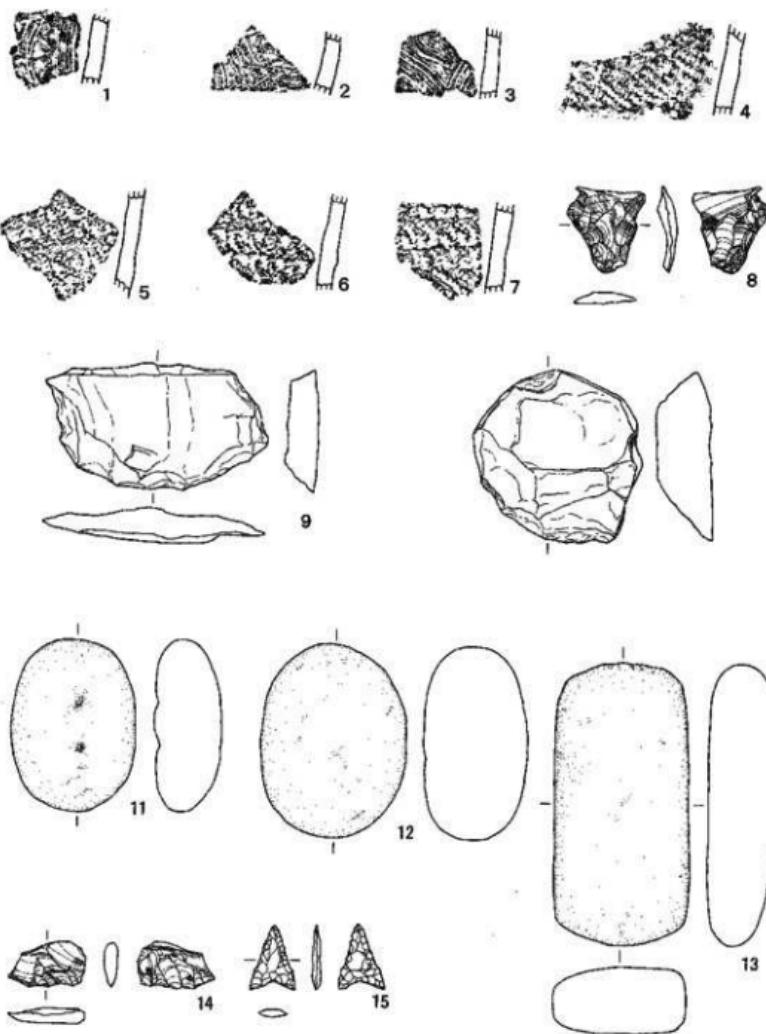


図51 21号住居址出土遺物 1/3 (14、15は2/3)

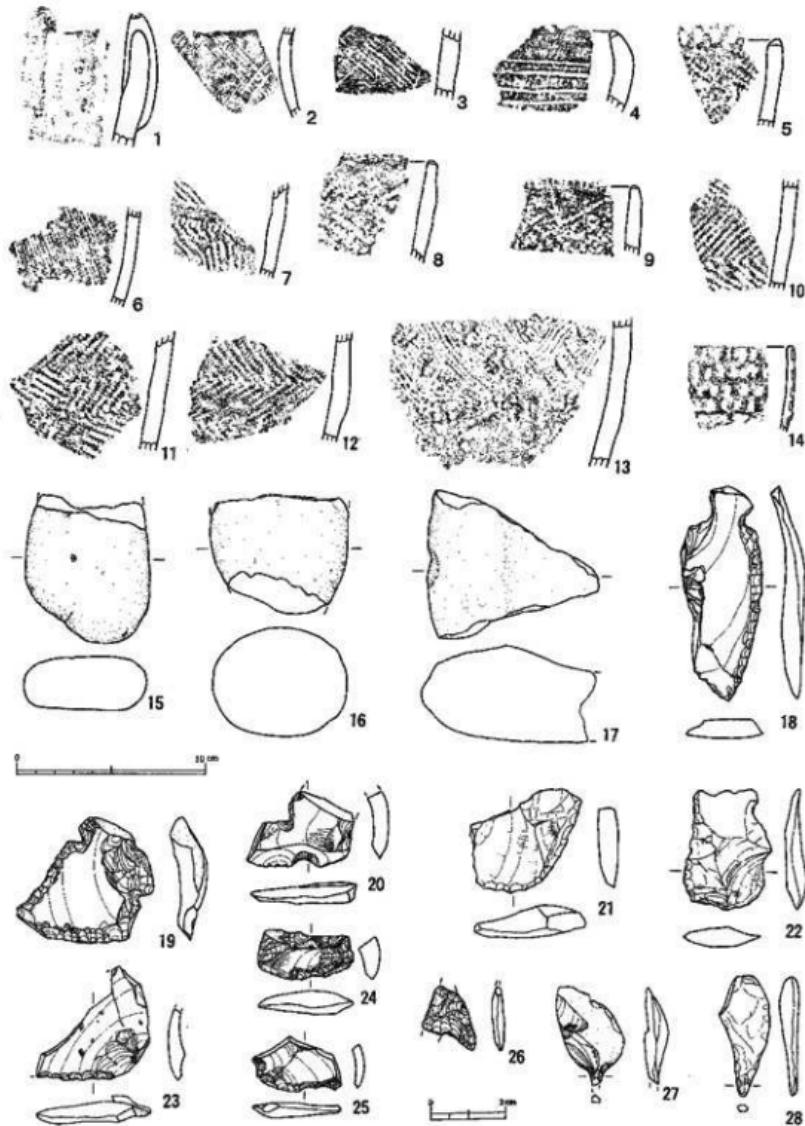


図52 22号住居址出土遺物 1/3 (18~28は2/3)

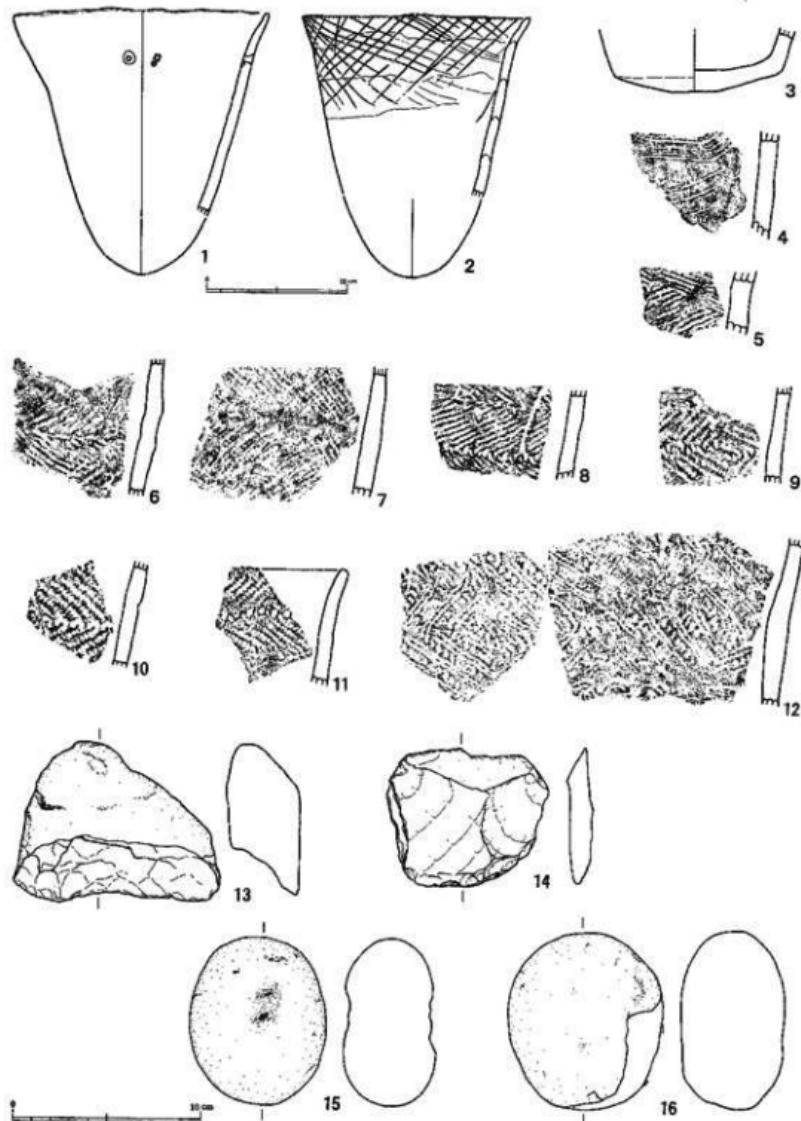


図53 23号住居址出土遺物 1/3 (1、2は1/4)

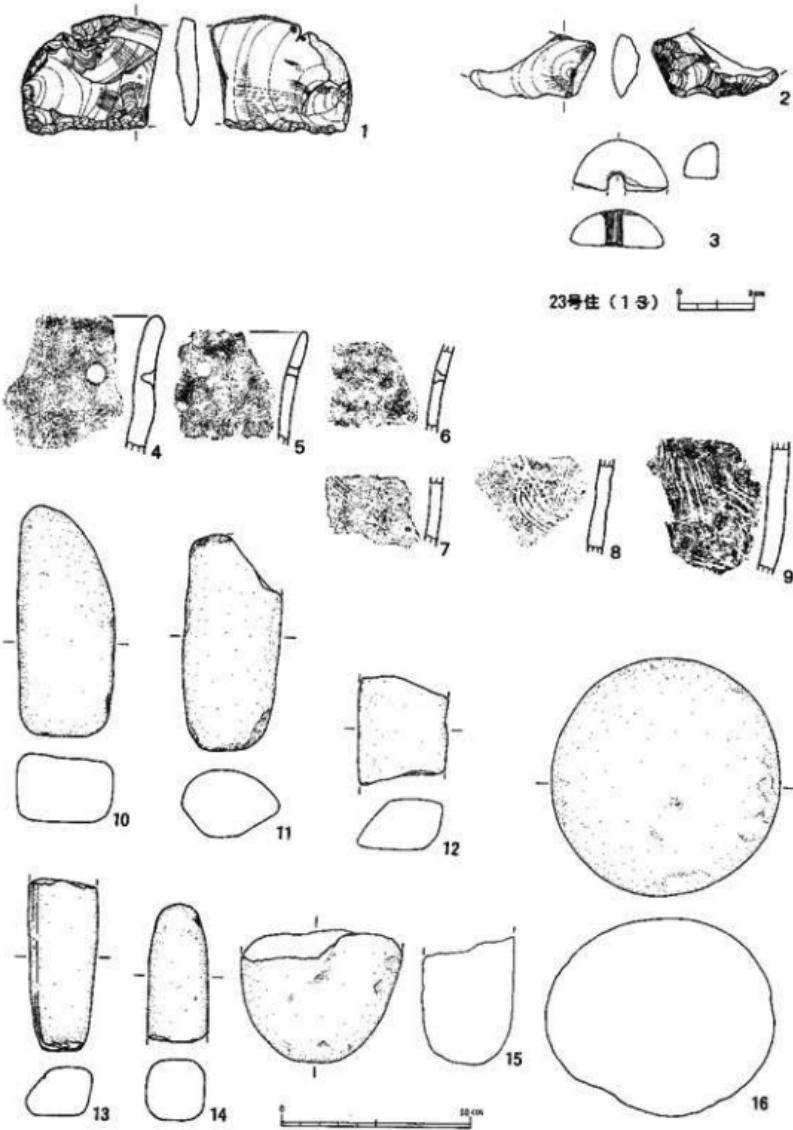


図54 23、24号住居址出土遺物 1/3 (1~3は2/3)

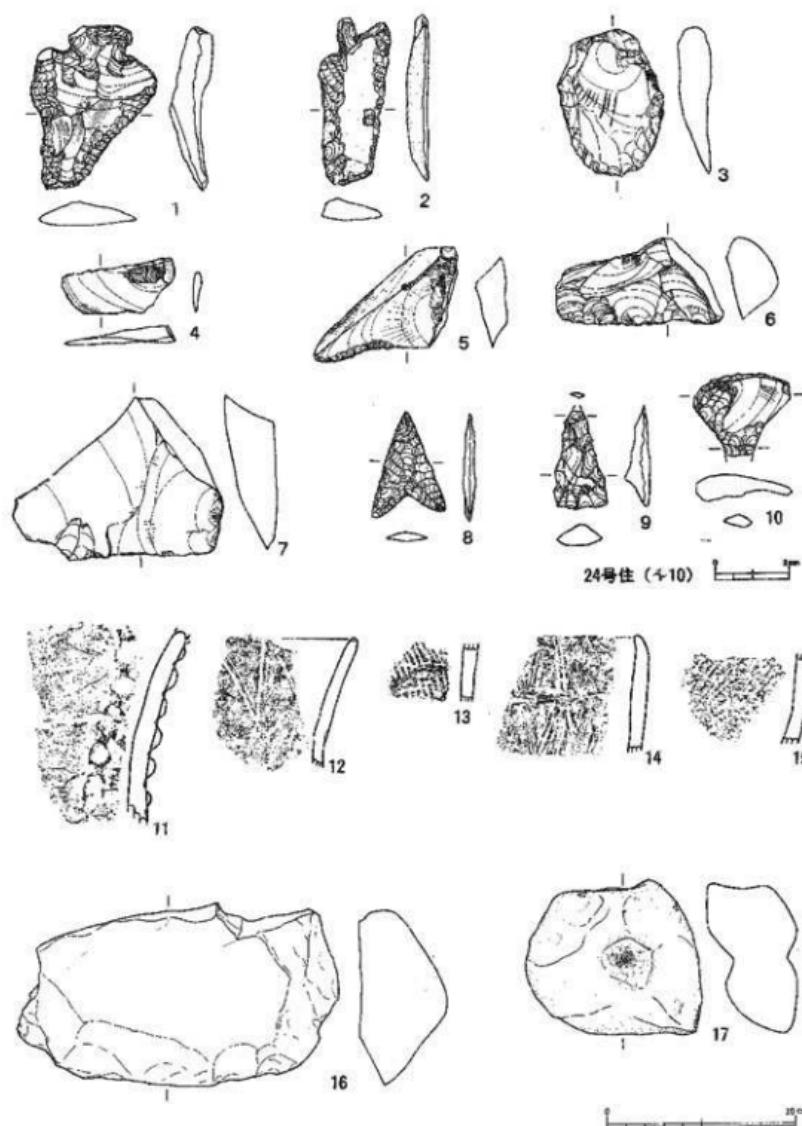


図55 24、25号住居址出土遺物 1/3 (1~10は2/3)

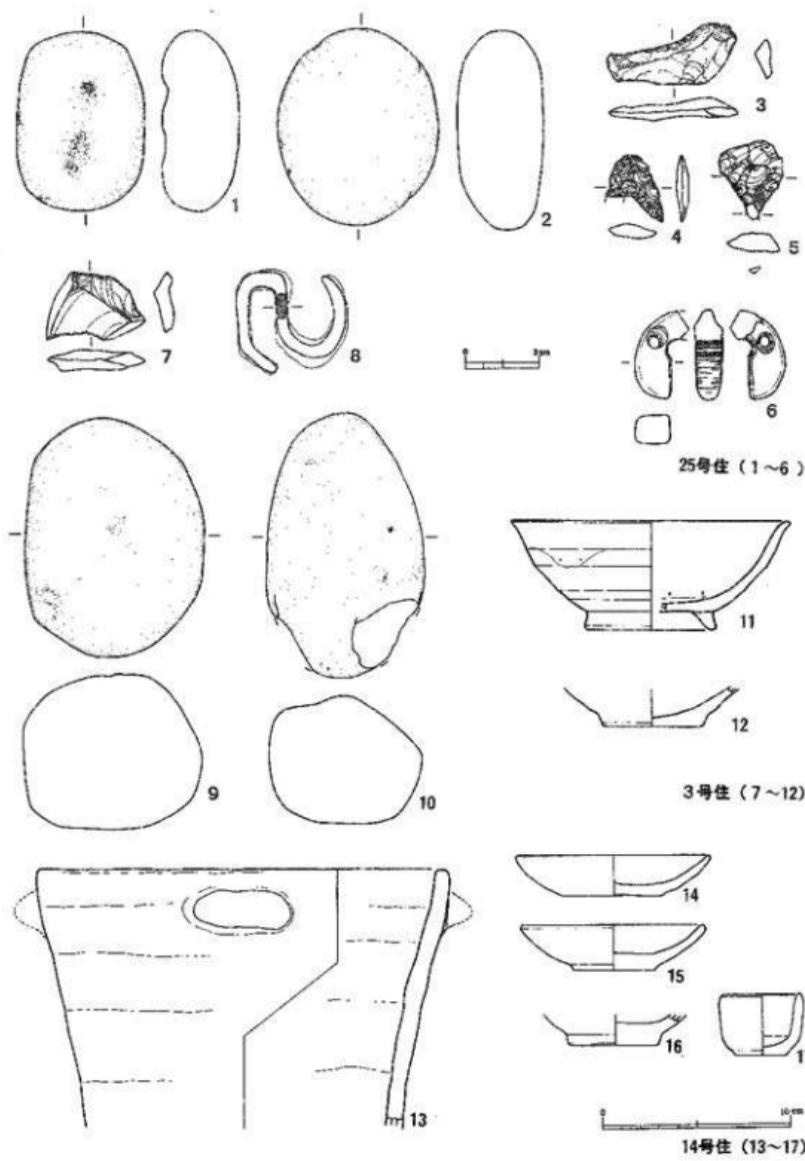


図56 25、3、14号住居址出土遺物 1/3 (3~8は2/3)

## 付編

白州町教育委員会

### 上北田遺跡 炭化材・炭化種子同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

貴、白州町教育委員会殿より御依頼のありました「上北田遺跡 炭化材・炭化種子同定」が終了致しましたので、その結果を下記の通り御報告申し上げます。

#### 記

はじめに	p. 1
1. 材同定	p. 1 ~ 3
2. 種子同定	p. 3 ~ 4
3. まとめ	p. 4
文献	p. 5

## 上北田遺跡から出土した炭化材および炭化種子の同定

### はじめに

上北田遺跡は、白州町横手字上北田に位置し、釜無川の支流である尾白川と大武川にはさまれた河岸段丘の高位面に立地する。

発掘調査の結果、本遺跡からは縄文時代前期初頭の住居址22軒、平安時代以降の住居址3軒、中世と考えられる獨立柱建物址2軒、土坑220基と溝状遺構などが検出されている。

今回の調査では、4軒の住居址（2号、17号、18号、20号）から出土した炭化材について材同定を行いその樹種を明らかにする。また、17号、18号住居址については、炭化種子の同定も行い当時の可食植物について検討を行う。

### 1. 材同定

#### （1）試料

試料は、上北田遺跡の4軒の住居址（2号、17号、18号、20号）から検出された炭化材6点である。試料が採取された住居址の時代は、いずれも縄文時代前期初頭でNo.1～5は建築材、No.6は燃料材と考えられている。

#### （2）方法

試料を乾燥させたのち横断面・放射断面・接線断面の3断面を作製、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。

#### （3）結果

同定結果を表1に示す。6点の試料のうち、No.1は節であり道管要素が認められることから広葉樹であることはわかるがそれ以上の同定はできなかった。その他の5点の試料は、確実な同定ができず類似種としたものもあるが3種類が同定された。同定根拠となった主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、現生種の一般的な性質などについては、「木の事典 第2巻」（平井、1979）を参考にした。

表1 炭化材の樹種

番号	検出遺構など	用 途	樹 種 名
No. 1	2号住居址	建築材	広葉樹（節）
No. 2	17号住居址	建築材	クサギ
No. 3	17号住居址	建築材	クリ
No. 4	18号住居址	建築材	クリ類似種
No. 5	18号住居址	建築材	タケ葉材の一種
No. 6	20号住居址 地床炉中	燃料材	クリ類似種

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科

環孔材で孔圓部は1~4列、孔圓外で急激に管徑を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形~橢円形、小道管は単独および2~3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った橢円形~多角形、とともに管壁は薄い。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状~網目状となる。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、椿木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果実は食用となる。各地の遺跡からの出土例の多い樹種の一つである。

・クサギ (*Clerodendrum trichotomus*) クマツラ科

環孔材で孔圓部は3~4列、孔圓外でやや急に管徑を減じのち年輪界に向かって漸減する。大道管は管壁厚は中庸、横断面では橢円形、ほとんど単独、小道管は管壁はやや厚く、横断面では橢円形~多角形、単独および2~4個が複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、1~6細胞幅、50細胞高を超えることもある。柔組織は周囲状、翼状~連合翼状およびクーミナル状。年輪界はやや不明瞭。

クサギは北海道南西部以南の全土に自生する落葉低木で、庭木としても植栽される。その名の示すように葉に悪臭がある。材は軽軟で、用途は特に知られていない。

・イネ科タケ亜科の一種 (Gramineae subfam. Bambusoideae sp.)

維管束が基本組織の中に散在する不齊中心柱をもつ。

タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

#### (4) 考察

##### ・建築材

5点の試料 (No.1~5) は、クリ2点(類似種1点), クサギ1点, タケ亜科の一品種1点, 広葉樹(節)1点という結果であった。今回の試料は4つの住居址で5点であり、この結果から各住居址の建築材の傾向等について推定することは困難である。しかしながら、5点中2点出土しているクリは、時代を問わず建築材として一般的な樹種である。柱材等強度を必要とする部位にも使用されてたことが知られており、本遺跡でもクリの強度等を意識した用材選択があったことが考えられる。また、タケ亜科は柱等の部位よりも屋根材、壁材、敷物等に用いられたものと考えられる。

##### ・燃料材

No.6のクリ1点のみである。したがって、今回の結果から当時の燃料材の傾向等について推定することは困難であるが、建築材に用いられていたクリが燃料材としても有用材として認められ

使用されていたことが考えられる。

## 2. 種子同定

### (1) 試料

試料は、绳文時代前半の住居址（17号、18号）から出土した炭化種子20点である。これらの試料については、同定結果とあわせて表に示す。なお、ここでいう「種子」とは、形態学的な「種子」の意味ではなく、果実や偽果を含めた広義の意味での「種子」である。

### (2) 方法

肉眼あるいは双眼実体顕微鏡を用いて形態の特徴から同定を行った。

### (3) 結果

同定結果を表2に示す。同定された種類は、コナラ属A、コナラ属B、クリの3種類である。以下に形態的特徴を記す。

表2 炭化種子同定結果

番号	検出遺構	種類	番号	検出遺構	種類
No. 1	18号住居址	コナラ属 A (子葉)	No. 11	18号住居址	クリ (子葉)
No. 2	18号住居址	コナラ属 A (子葉)	No. 12	18号住居址	芽 (花芽?)
No. 3	18号住居址	コナラ属 A (子葉)	No. 13	18号住居址	芽 (花芽?)
No. 4	17号住居址	コナラ属 A (子葉)	No. 14	18号住居址	果実?
No. 5	17号住居址	コナラ属 A (子葉)	No. 15	18号住居址	芽 (花芽?)
No. 6	17号住居址	コナラ属 A (子葉)	No. 16	18号住居址	同定不能
No. 7	17号住居址	コナラ属 B (子葉)	No. 17	18号住居址	同定不能
No. 8	17号住居址	コナラ属 B (子葉)	No. 18	18号住居址	同定不能
No. 9	18号住居址	コナラ属 B (子葉)	No. 19	18号住居址	同定不能
No. 10	18号住居址	コナラ属 B (子葉)	No. 20	18号住居址	同定不能

#### ・コナラ属 A (*Quercus* sp. type A) ブナ科

子葉が検出された。炭化が著しく黒色。大きさは最も大きい試料番号1の個体で縦軸15mm、横軸15mm程度。ほぼ球形で先端部は少し突出し、基部はややへこんでいる。維管束の跡が深い溝となって縦方向に何本も見られる。表面には脈状の維管束の跡がみられる。外形から判断すると、コナラ属の中でも比較的球形に近い果実を作る種類（クヌギ・アベマキなど）のどれかにあたると思われるが、いずれにあたるかを判断することはできない。全面に乾燥によって萎縮したときに生じたと思われるしわ模様が存在する。

#### ・コナラ属 B (*Quercus* sp. type B) ブナ科

子葉が検出された。炭化が著しく黒色。大きさは最も大きい試料番号8の個体で縦軸18mm、横軸11mm程度。梢円形で先端部は少し突出し、基部はややへこんでいる。維管束の跡が深い溝となって縦方向に何本も見られる。表面には脈状の維管束の跡がみられる。外形から判断すると、コ

ナラ属の中でも梢円形の果実を作る種類（コナラ・ミズナラなど）のどれかにあたると思われるが、いずれにあたるかを判断することはできない。全面に、乾燥によって萎縮したときに生じたと思われるしわ模様が存在する。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科

子葉が検出された。炭化が著しく黒色。大きさは縦軸12mm、横軸14mm、厚さ7mm程度。上面観は偏平な梢円形、側面観は縦方向につぶれた梢円形。維管束の跡が縦方向に向かって深い溝となってみられる。表面には、乾燥によって萎縮したときに生じたと思われるしわ模様が存在する。

(4) 考察

今回検出された種子はいずれも古くから食用として利用されていた種類である。今回検出された個体は、いずれも果皮が取り去られており、また萎縮して堅くなっている。この点から考えると、これらの種子は食用として利用されていた可能性が高く、保存のための処理（水きらし・乾燥）を施して蓄えておいたものが何らかの原因によって炭化したものなのかもしれない。

コナラ属の子葉を食用とする場合には「あくぬき」が必要となるが、このような技術を当時の人々が持っていたということは興味深い結果である。たとえば、高度な「あくぬき」の技術を要する「トチの実」の場合でも、遺跡の出土状況などから縄文中期にはすでに行われていたと考えられている（渡辺、1975）。コナラ属Aが飯にクヌギやアベマキだとした場合、これらの「ドングリ」は特に「あくぬき」が難しいことから、当時食用として利用されていたとすれば、当時の調理技術を語る上で興味深い結果であろう。

クリは、「あくぬき」をする必要がない可食植物である。縄文時代から出土するクリは2cm以内の小型のものが多い（鈴川、1983）、今回出土したものも同様に小さい。

3.まとめ

材同定では、建築材としてクリ、クサギ、タケ亜科が使用されていたことが明らかとなり、このうちタケ亜科については屋根材、壁材、敷物等に使用されていたことが推定された。また、燃料材ではクリが使用されており、クリが建築材の他に燃料材にも使用されていたことがわかった。

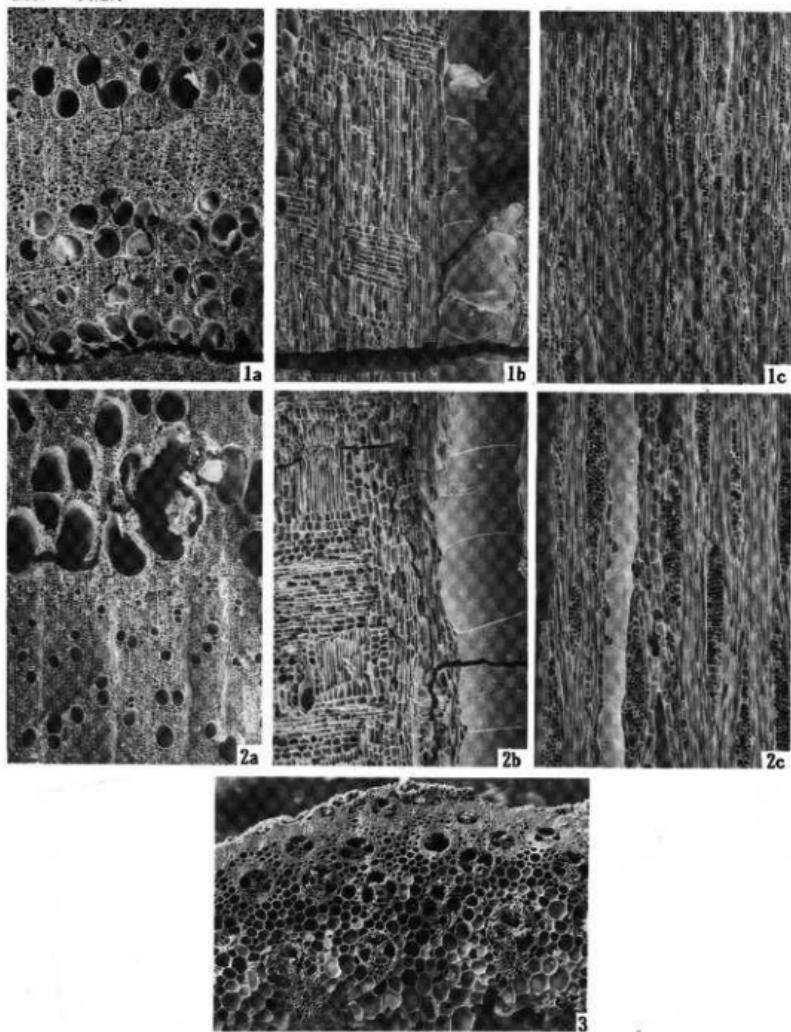
種子同定では、同定できない試料もあったが、コナラ属A、Bとクリの3種類が確認された。これらの種子はいずれも果皮が取り去られていることや萎縮して堅くなっていることから食用として利用されていた可能性が高く、保存のための処理を施して蓄えておいたものである可能性が指摘された。

食料として利用された可能性があるクリが建築材や燃料材にも利用されており、一見すると矛盾を感じる。このような問題に対し、千野（1983）は10年生前後までのクリが収量が多く、それ以降は収量が減少することに注目し、若木は食料源、老木は建築材として用いたことを推定している。今回の結果は、本遺跡でも同様のことが行われていたことを示しているのかもしれない。

### 文献

- 平井信二 (1980) 木の事典 第2巻。かなえ書房。
- 粉川昭平 (1983) 繩文時代の主な植物食糧。「縄文時代の研究 2 生業」, p. 42-49. 雄山閣。
- 千野裕道 (1983) 縄文時代のクリと聚落周辺植生 -南関東地方を中心に-。東京都埋蔵文化財センター研究論集 II, p. 27-42. 財団法人東京都埋蔵文化財センター。
- 渡辺 誠 (1975) 縄文時代の植物食。雄山閣, 247p.

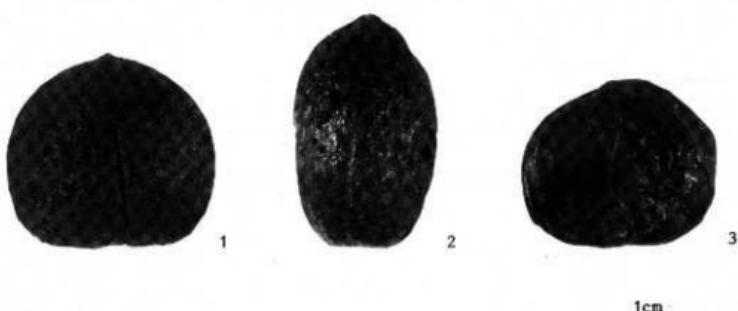
図版1 炭化材



1. クリ (No. 3) , 2. クサギ (No. 2) , 3. タケ亜科の一種 (No. 5)  
a : 木口, b : 征目, c : 板目

■ 200 μ : a  
■ 100 μ : b, c, 3

図版2 炭化種子



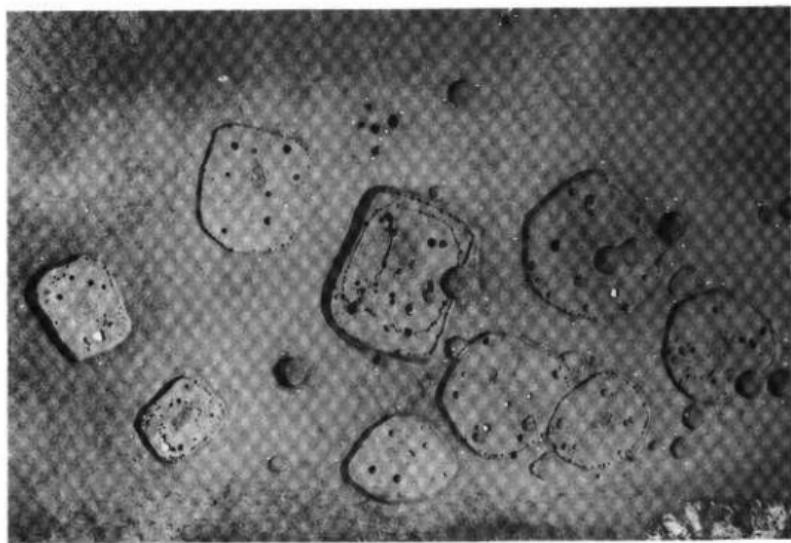
1. コナラ属A・子葉（試料番号；1）  
3. クリ属・子葉（試料番号；11）

2. コナラ属B・子葉（試料番号；8）



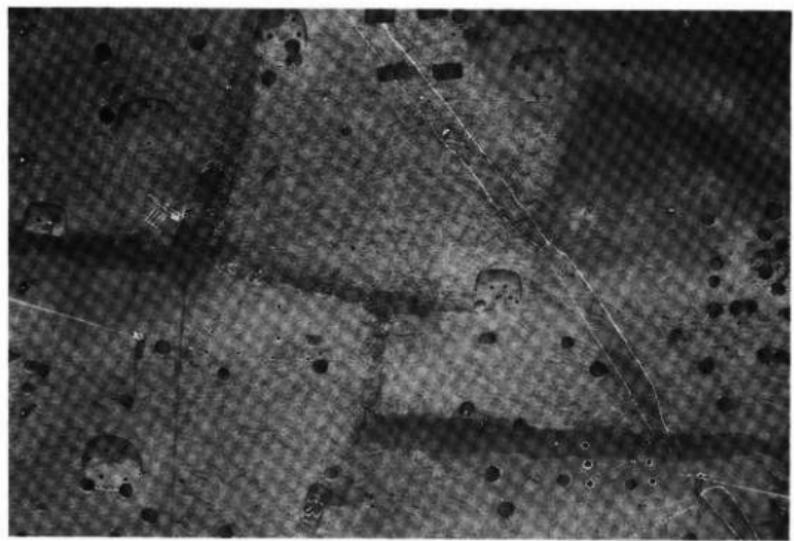
全景（東から西へ）上、調査前 中、調査中 下、調査後

図版 4



近景 上、23号住から南へ 下、調査区東（空撮）

図版5

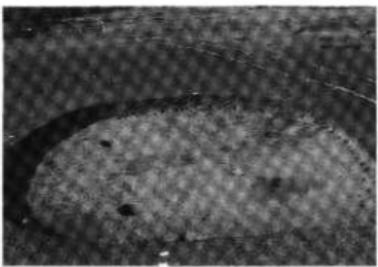


空撮 上、調査区中央 下、調査区北

図版 6



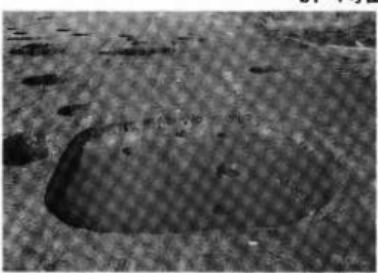
a. 2号住



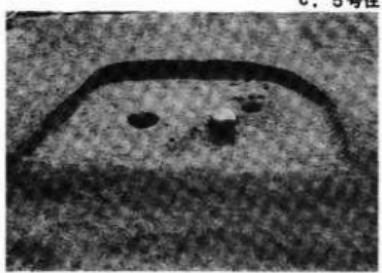
b. 4号住



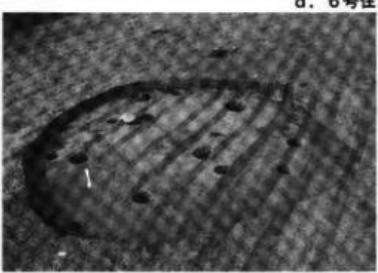
c. 5号住



d. 6号住



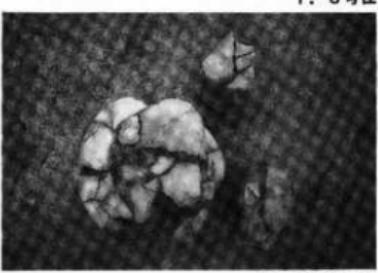
e. 7号住



f. 8号住



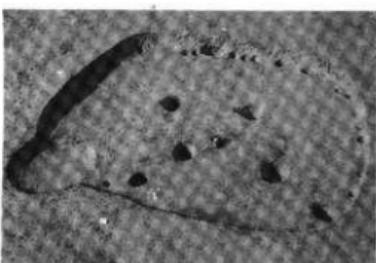
g. 9号住



h. 9号住土器



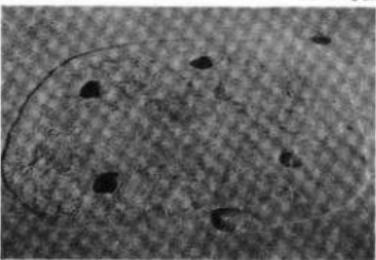
a. 10号住



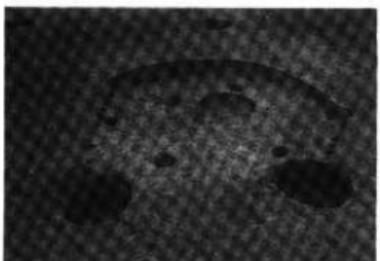
b. 11号住



c. 12号住



d. 13号住



e. 15号住



f. 16号住

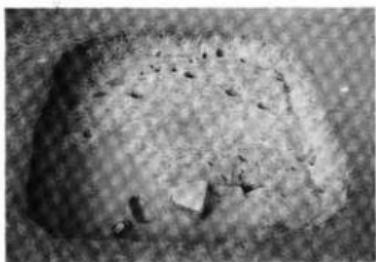


g. 16号住 土器

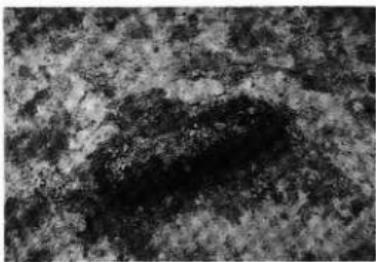


h. 16号住 土器

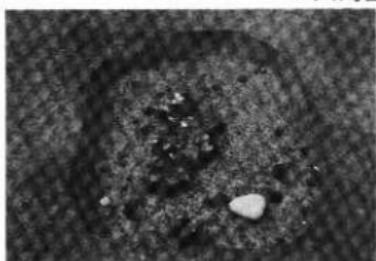
图版 8



a. 17号住



b. 17号住 炭化材



c. 18号住



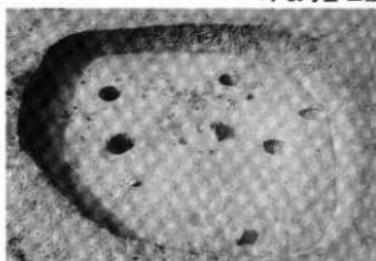
d. 19号住



e. 20号住 土器



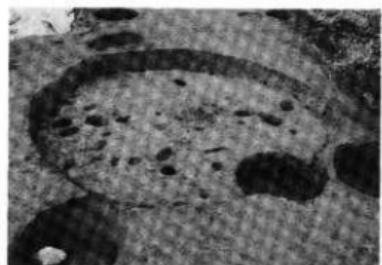
f. 20号住



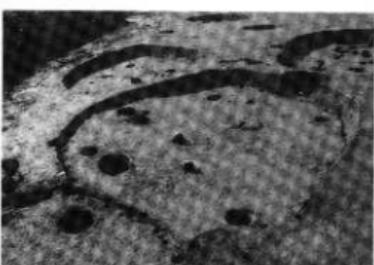
g. 21号住



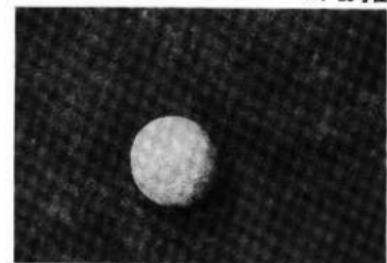
h. 22号住



a. 23号住



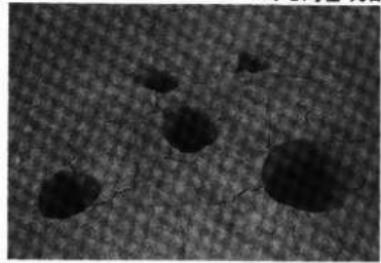
b. 24号住



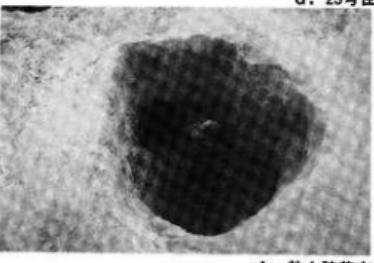
c. 24号住 丸石



d. 25号住



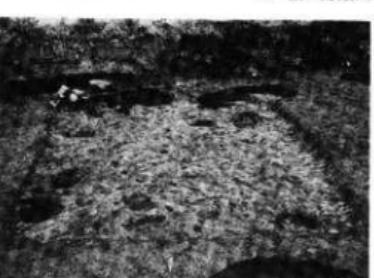
e. 粘土貯藏穴



f. 粘土貯藏穴

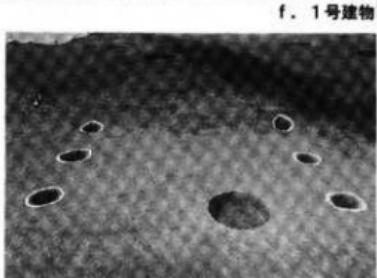
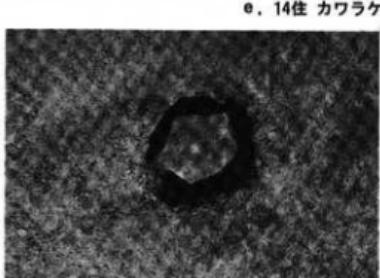
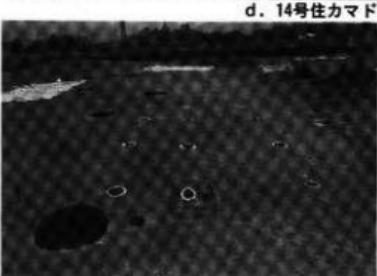
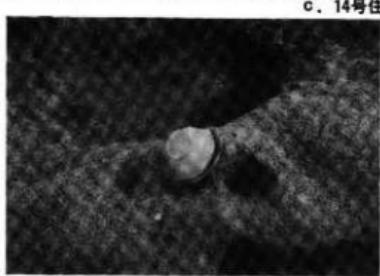
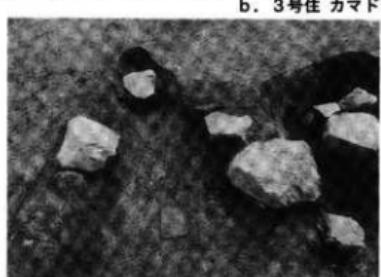


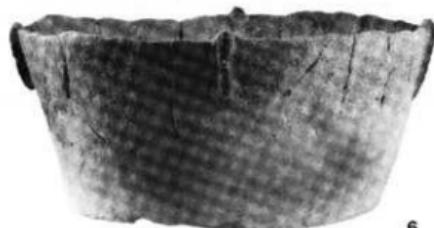
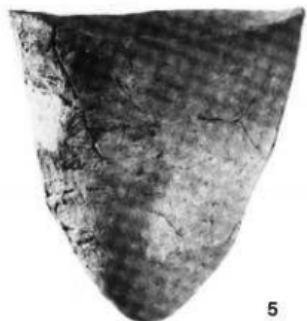
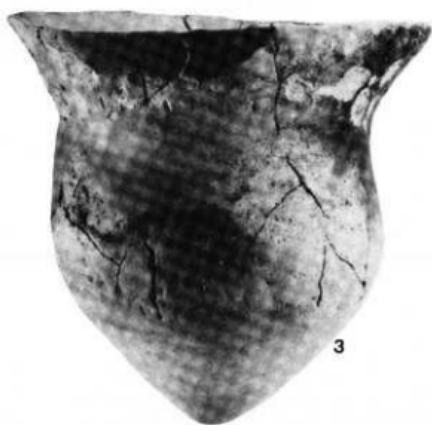
g. 18号住 作業風景



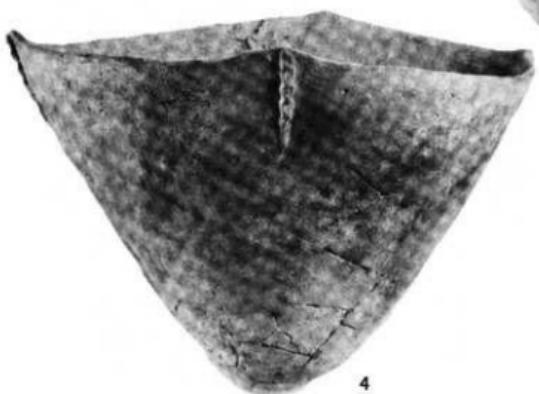
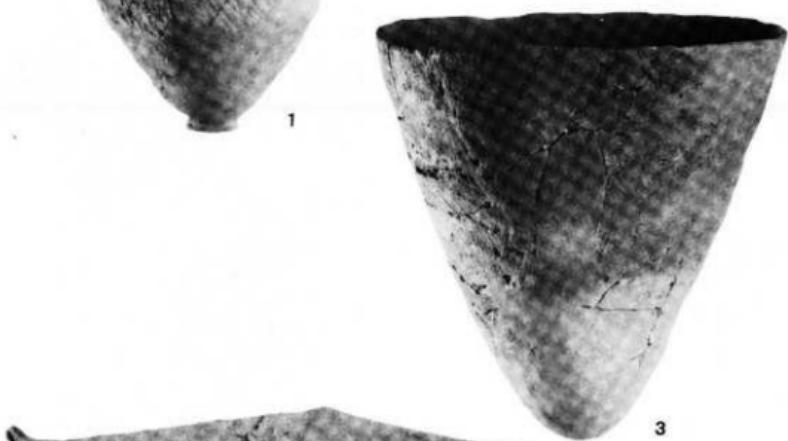
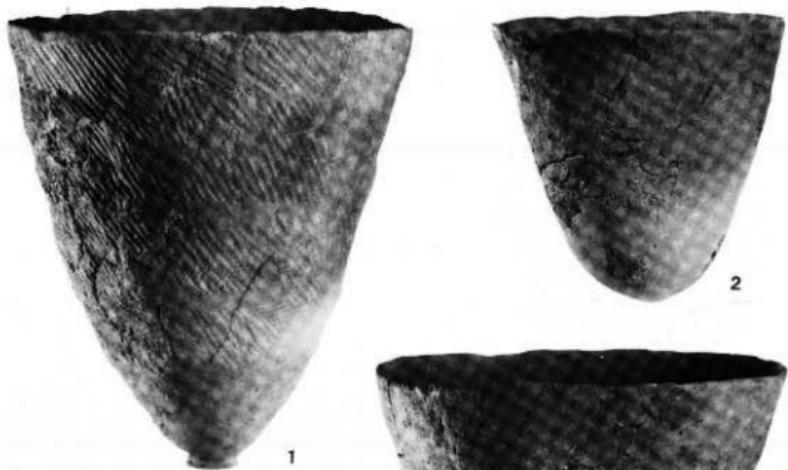
h. 1号住

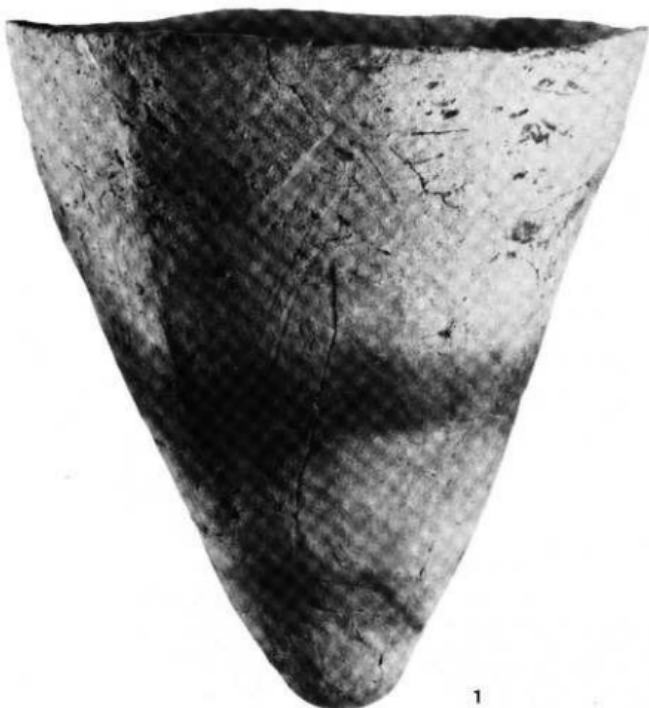
図版10





図版12





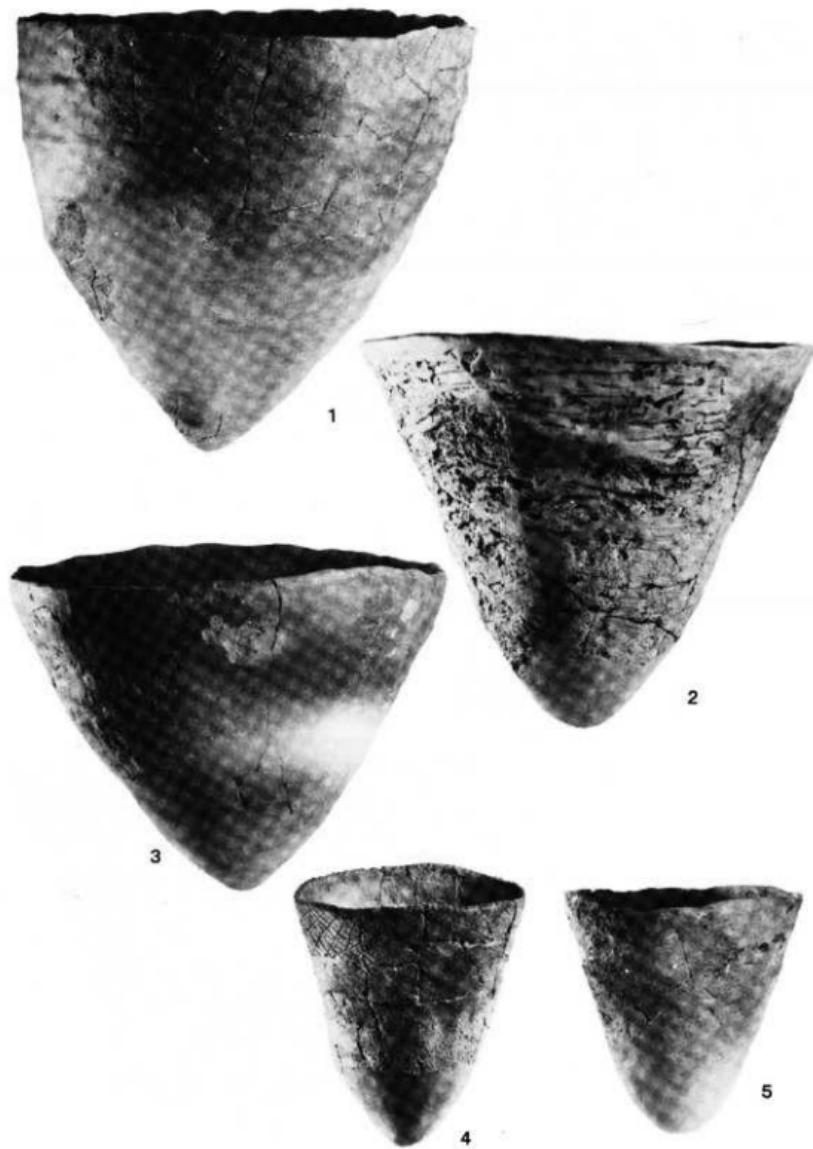
1



2

1/4

図版14





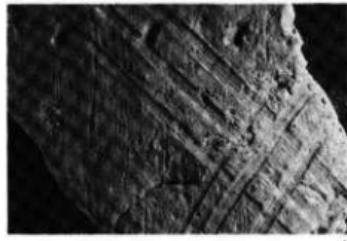
a



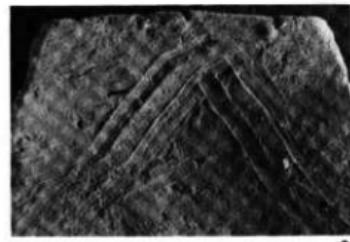
b



c



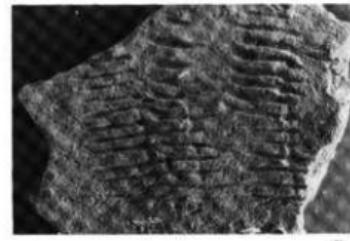
d



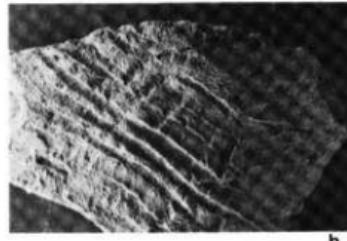
e



f

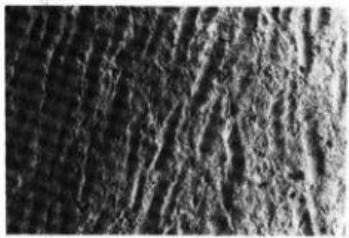


g



h

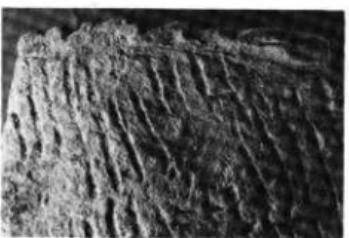
图版16



a



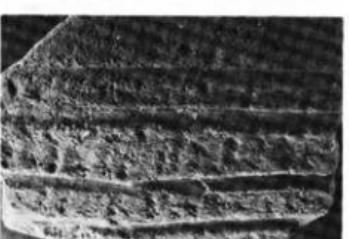
b



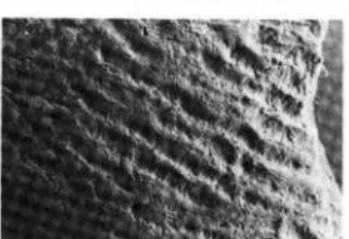
c



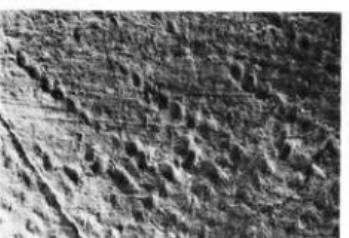
d



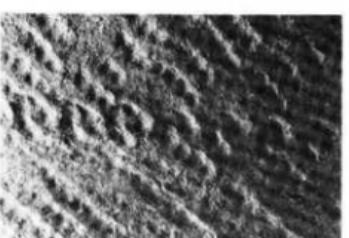
e



f

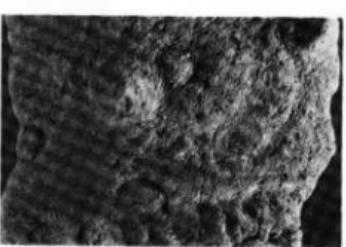
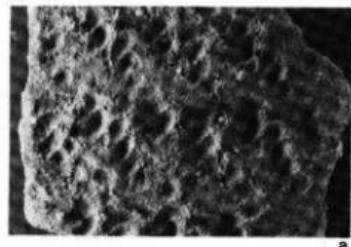


g



h

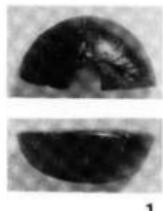
土器文様②5/4



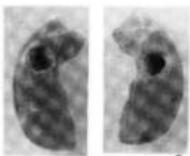
图版18



18号住居址出土石器



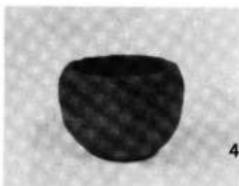
1



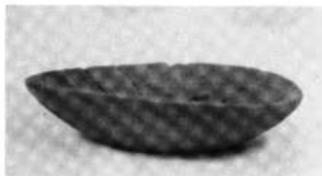
2



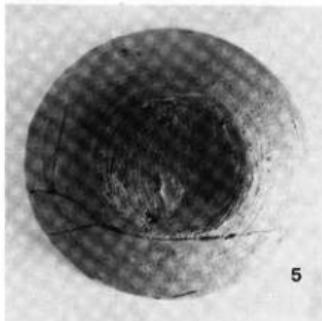
3



4



5



6

1~3 (1/1) 4~6 (1/2)

図版20



## 上北田遺跡

印刷 平成5年3月1日

発行 平成5年3月10日

発行 白州町教育委員会

印刷 総北印刷株式会社

